七ヶ浜町文化財調査報告書第２集

史跡「大木囲貝塚（だいぎがこい）」環境整備調査報告書II

昭和49年3月

七ヶ浜町教育委員会

正　誤　表

ページ	見出し或は段落	行	誤	正
4		上から10	田沢金吾	田澤金吾
5		〃 18	信仰の揚	信仰の場
14		〃 7	第8図	第9図
		〃 10	第8図	第9図
		〃 15	人為器	人為品
15		〃 4,9	*hodohylax*　*hodophylax*	*hodophilax*
		下から10	強張	強調
16		上から1	授取	採取
17	棲息場所欄	4,8,13,15,16	岩焦	岩礁
	分　布　欄	3	房総以内	房総以南
18		14	i）ミズワニ属	i）を削除
		18	DF80L 1出土	削除
19	メバル	15	前上顎骨2は	前上顎骨2コは
	クロマグロ	下から5	現在マグロ科	現生マグロ科
21		上から14	小高文夫	小高民夫
23		1	あげられる。	あげられている。
	左表のはばの欄中	5	8.3	7.3
24	本文の6行目	6	L/W×100の率	L/W×100の率が
29	引用文献	下から2	小池裕子	K_{OIKE} H_{IROKO}
30		7	PL. XI	PL. XI
		8	Rep	Rep.
		下から12	竹内勝郎	竹丸勝郎
		〃 6	4月	5月
			Bib	Bib -
34	7．イボニシ		〔写真を裏返しに引伸ばしてしまった〕	〔殻口が右にくる〕
折込図	図11		AF62	FA62

序

史跡大木囲貝塚は，日本有数の大貝塚であって，大正中期より昭和の初期多くの知名の考古学者，人類学者によって発掘調査され，その出土品には，石器，土器，骨角器，獣骨，魚骨，鳥骨，人骨等あり，考古学的研究資料が豊富に埋蔵されており，貴重な貝塚であると，にわかに有名となった。

しかるに，当貝塚は，眺望よく，住宅地として最適地であるため，近年貝塚の一部が宅地造成され，破壊されようとしたので，急遽その保護のため，昭和43年３月18日国指定となった。直ちに昭和43年度より，用地の買上げを開始し，昭和49年度で完了する予定である。

用地買上げ後，指定区域の耕作は全く行われず，全域に雑草・雑木が繁茂密生し，史跡として見るかげもない状態となったので，この貴重な埋蔵文化財を保護，活用をはかるため，史跡公園として環境整備を行なうこととなり，国庫補助，県費補助をうけ，昭和47年度より，６ケ年継続事業として，環境整備をはじめた。本年はその第二年度であり，覆屋建設の地区選定のため試掘調査を行ったほか，苑路の一部造成，貝層分布調査及び現生植物の調査を行なった。その成果をまとめ，報告書第２集として発刊するものである。報告書の作成にあたり，予算の都合上，ページ数を制限せざるをえなかった。執筆者のかたがたの努力に感謝いたします。

本報告書によって大木囲貝塚の価値を地域社会の人々に理解して戴き，更に研究者の方々の参考となれば幸甚である。

なお，この環境整備事業並びに報告作成に当って，懇切に指導下さった，文化庁の安原啓示氏，多賀城跡調査研究所長の岡田茂弘氏，東北大学名誉教授伊東信雄氏並びに環境整備指導委員会の委員の方々に深甚な感謝を捧げます。

昭和 49 年 3 月

七ケ浜町教育委員会教育長　山　家　　正

目　　次

序……山家　正

Ⅰ．試掘調査について……八巻　正文……　1

Ⅱ．試掘により出土した遺構，遺物……　4

A．住居址と集落……八巻　正文……　4

B．人工遺物……　5

1．土器・陶磁器……八巻　正文……　5

2．石器・石製品……千葉　英一……　9

3．骨角器……八巻　正文……　14

C．自然遺物……八巻　正文……　15

1．貝……　15

2．魚……　18

3．四肢動物……　20

4．鳥……　25

5．糞石……　26

Ⅲ．分布調査……八巻　正文……　27

あとがき……　29

引用文献……　29

Ⅰ．試掘調査について

A．調査関係者

調査責任者　伊東信雄（東北大学名誉教授）

調査員　　八巻正文（七ヶ浜町教育委員会嘱託）

参加学生　　東北大学大学院博士課程―平口哲夫，小林博昭。東北大学大学院修士課程―岡村道雄，清水芳裕，千葉英一，今野裕明，黒川利司。東北大学研究生―井上真理子，戸田正勝。東北大学考古学科４年―飯島義雄。宮城教育大学―三浦好江，渋谷正三，鈴木まち子，斎藤智恵子，斎藤輝子。明治大学―阿刀田裕子，吉田まゆみ。東北学院大学―阿部正光，阿部輝子。宮城学院女子短期大学―滝川京子，高橋由美子。宮城県塩釜女子高等学校―相沢香代子。

人夫　佐藤勝江，佐藤京子，佐藤鋼治，佐藤捨松，佐藤とみこ，佐藤とめよ，佐藤はるの，佐藤文子，佐藤ミノル，鈴木うん，鈴木けさの，鈴木しげこ，鈴木とめ，鈴木みつえ，我妻エイ子，渡辺むめよ。

協力　金子浩昌（早稲田大学），後藤勝彦（宮城県塩釜女子高等学校），千葉宗久（飯野川第二小学校），遊佐五郎（色麻小学校），佐藤好一（高清水小学校），丹治英一（磐梯青年の家），安田喜憲（東北大学大学院博士課程学生），外山凡平（教育映画株式会社），福田友之（北海道教育庁），佐藤武夫。

指導　芹沢長介（東北大学教授）

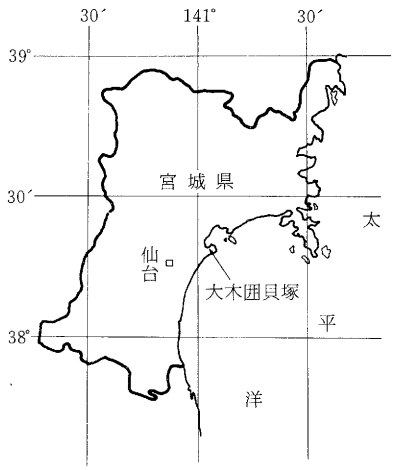


図１　大木囲貝塚の位置

B．大木囲貝塚の位置（図１）

東経141°２′36″から３′３″の間，北緯38°17′58″から18′15″の間。

地籍は宮城県宮城郡七ヶ浜町大字東宮浜字東大木，西大木，北下方，南下方の四つの小字にまたがる。

５万分の１地形図「しおがま」NJ－54－15－15

C．試掘の目標

大木囲貝塚では，最も良い地区に覆屋をかけ，その中で発掘しているところを一般の見学者に見ていただく計画である。したがって貝層が厚く広く堆積していて，できれば住居址が近くにある地区をみつけねばならない。

D．試掘地点の選定

大正時代以来の発掘の結果をしらべ，昭和47年度に福田友之によって行われた埋蔵貝層分布

調査成果をもとに地点を検討し，伊東信雄，岡田茂弘に現場においでいただき最終的に地点を選定した。伊東信雄によれば山内清男（1929，５）の発掘地点Ａ～Ｅのうち Ｂ地点は図11に示した破線の円印の付近であるが他はよくわからないという。

Ｅ．地区設定（図11参照）と層位

史跡全域を方眼に地区割した。海に向って舌状につき出ている丘の標高の高い線に縦軸を設け２地点に基準の石標を立てた。この縦軸を３ｍ単位で区切り，南から北にアルファベットＡ～Ｔの記号をつける。これだけでは60ｍにしかならない。そこでさらにこの上の単位として60ｍごとにＡ，Ｂ，Ｃ……の記号をつけた。

縦軸に直交する横軸も３ｍ単位で区切り，記号として数字を東から西に１～99を３ｍごとにつけた。しかしこれだけでは史跡全域をおおうことができない。そこで東部地域には最初にＥを冠し，西部地域にはＷを最初に冠することとした。

石標は北のものをＦＡ70，南のものをＣＡ70地点とした。例えば西部地域の地点，区はWFＡ00のように表わすことになる。

層位を表わす場合には各地区ごとに上から大きく１，２，３……層ととらえることとし，各層中にさらに細い層，ブロックがある場合にはアルファベットの小文字をつかった。したがって遺物の出土した地区，層はＤＦ45Ｌ３ｂのようにあらわすことができる。

３×３ｍの小地区の中をさらに区分する場合にはアルファベットの小文字をつかいその区の範囲を平面図に記録した。これはＤＦ45b のように表わす。

Ｆ．発掘方法

覆屋建設計画の構想から，良い貝層や住居址があらわれても掘上げないことにし，検土杖をつきさすこと等によって下の様子が判明すれば発掘を中止することにした。貝層が斜面の場合，上の地区の浅いところで下の地区の下層の貝層が出るのが一般的なので斜面に直交してトレンチを設けた。また以前に発掘した際に良い貝層が発見された地点を先生がたに教えていただきそこにトレンチを設けた。以前掘ったところを掘れば簡単に地山までの土層を知ることができるし，ほとんど掘られてしまったところに覆屋を建設してもむだなので過去における発掘地点の確認をしておく必要がある。

Ｇ．調査経過

第１地点は貝層及び住居址をみつけるためにトレンチが設けられた。試掘区は次の通り。DF45～50，52～56，58，60，62，70～81，83。ＤＥ53，54。後藤勝彦の御教示によれば昭和38年東北大学教育学部歴史研究室が発掘したＡ地点はＤＤ49付近，Ｂ地点はＤＣ52付近である。Ａ地点出土の土器については小笠原好彦（1968）の論文がある。ＤＦ54地区で住居址の１部が表われたので発掘区を北に拡大した。それが第４地点である。

第２地点は昭和24年東北大学文学部伊東信雄によって発掘された地点である。伊東信雄によれば貝層は80cm程の厚さがあり，大木囲貝塚の中では貝層が非常に良い地点であるが，それだけにこの付近は何回も発掘されているという。発掘の結果ＣＦ43，44地区で昭和24年の発掘区及びその他の発掘区があらわれた。図２参照。試掘区はＣＦ43，44，46区である。

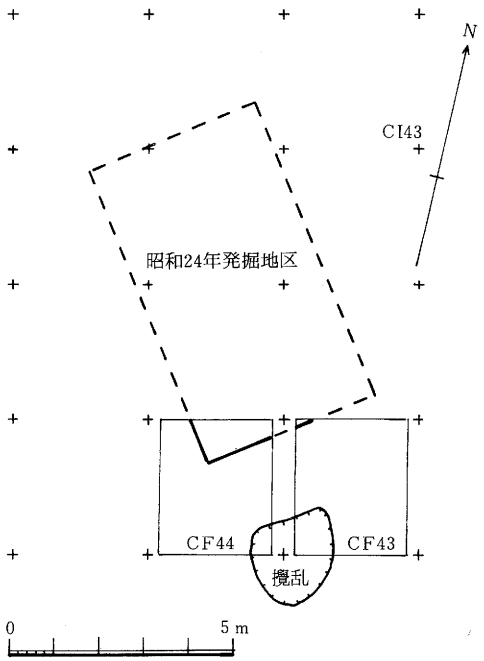


図２　ＣＦ43、44地区に昭和24年東北大学文学部伊東信雄による発掘地区があらわれた

第３地点は昭和47年度の埋蔵貝層分布調査の時，良い貝層の存在が確認されていた地点である。試掘地区はＣＳ70，71，76～80。

第４地点は住居址検出のため試掘した。試掘地区はＤＧ53～56，ＤＨ47～49，53～56，ＤＩ46～56，ＤＪ46～56，ＤＫ46～56。

第５地点は住居址及び良い貝層をみつける為に試掘したが，第二次世界大戦中，高射砲陣地となった為，また急斜面の為，保存が悪かった。

Ｈ．調査結果

良い貝層のみつかった区は次のとおりである。

ＣＦ44地区は混土貝層で厚さが約80cmあるが過去における発掘のあとが多く，この区の上の斜面ＣＦ45地区の方が良いと思われる。ＣＳ78，ＤＦ48，ＤＦ74，75，81～83，ＤＫ46～48，ＦＥ60～ＦＩ60地区は混土貝層が１ｍ以上である。

住居址については別に述べる。

なお試掘の結果何もなかった地区はＤＫ54，55，ＦＡ61，62，ＦＢ62地区であった。

Ｉ．結　論

覆屋は 100坪では小さい。また遺構の保存管理はプレハブでは十分行えない。何もない地区に覆屋の壁がくるようにするのがのぞましい。発掘した貝層や住居址を保存する技術は未だ不十分であり，実験をしなければならない。

今後苑路造成などの工事にともない事前調査が行われるので，住居址やもっと良い貝層が発見されるだろうから，覆屋建設は事前調査が十分なされた後で建設するのが良い。

（八巻正文）

II．試掘により出土した遺構・遺物

A．住居址と集落

今回の試掘では保存状態のよい住居址はみつからなかった。DF54，55，DG53～56，DH54～56区にまたがって出土した遺構は住居址と思われるが柱穴がほぼ円形（径約8m）に出土したのみで竪穴の壁，床面，炉などは長い間の浸食や耕作により消失したらしい。柱穴（pitNo. 16. 36. 40. 43）から出土した土器は大木8b，9式が主で，大木10式を少量含む（図版I－B－1）。なお調査が晩秋に入り霜柱が立ち風化が激しいため埋めもどしたのでくわしくは再度の調査に待たねばならない。(図11参照)

住居址の位置について，貝層の下にあるのではないかという意見が多かった。貝層の下から住居址が出土した例（菅原正明　1972，田沢金吾　1940参照）は多い。大木囲貝塚は大正時代から貝層が発掘されて来ているが未だ住居址が発見されていない。これは住居が台地の高い平らな地域につくられ，貝殻などは斜面に捨てられていたためであろう。大木囲貝塚でもA－12b貝層地域のように斜面がゆるやかで高い方にまで貝層が確認されているところでは，貝層下に住居址が発見されるかもしれない。

集落を発掘によって調査することは，大木囲貝塚のような広大な面積の遺跡では容易でないし，浸食，耕作，土木工事などによってすでに消滅した遺構も少なくないから，集落については想定によらざるをえない部分が大きい。

今，仮に貝層の地域を谷部とも関連させ6グループに分けてみる。

○A－1

○A－2，A－3

○A－4，A－5，A－6

○A－7

○A－8，A－9，A－10，A－11

○A－12a，A－12b

それぞれの谷部には現在も道があるが，大昔にもあったにちがいない。また谷部には泉があったろう。現在わきだしている泉はDP15付近のみであるが，史跡内にはこの他にも水たまりがあちこちにみられる。大昔，台地は森になっており，水量も豊富だったにちがいない。

貝層の6グループと地形からこの台地を6分すると図3のようになる。どの地区からも分布調査の結果大木1から10式までの土器が採集されている。大木1式期にこの台地に人々が移って来たとき6家族はそれぞれきめられた地区に住居を設け，ごみ捨て場や仕事場，水汲場，炊

事場，貯蔵穴，墓などもそれぞれの地区の中に設けられたことであろう。基本的にはこれらの６家族が大木10式まで住んだのではないだろうか。

環状貝塚，或は馬蹄形貝塚の中央部を広場と考えるのが一般的である。しかし大木囲貝塚の場合，中央に広場があったろうか。今後の調査に待たねばならないが，台地は当時森になっていて，その中にある家々は冬の冷い風から守られたのではないだろうか。むしろ台地の東の浜辺が共有の場であり，他の集落へ行くにもこの浜辺から舟ででていったのではないだろうか。

中央台地の東に舌状に伸びた小さな台地がある。この斜面にも，Ｂ－１，Ｂ－２，Ｂ－３などの小さな埋蔵貝層が確かめられている。ある時期にこの小舌状台地に住居あるいは特殊な施設がたてられたのかもしれない。ここは生業の中心である漁場にもっとも近く，よそから大木囲の集落を訪れた人々もすぐ下の浜に舟をつけ上陸したにちがいない。あるいはこの舌状台地には集落の首長が住んだのかもしれない。或は共同の施設があったのかもしれない。

縄文時代前期中期を通して大木囲貝塚では家族数が大きく増加することはなかったのであろうか。家族の人数が増えた場合には住居を拡張したのだろうか，或は狭いままで生活したのであろうか。またよそから来て近くに家をたて仲間入りするということはなかったのであろうか。大木囲の丘は北の方にも伸びており，さらに丘の東西両側には小さな舌状台地がいくつもあるが，分布調査の結果では前述したＢ－１，Ｂ－２，Ｂ－３などの貝層のある小舌状台地のみが，ある時期何らかの建物が設けられたらしい。丘の北半や丘の東西の小舌状台地は，あるいは信仰の揚となっていたところもあったかもしれない。

ところで今回出土した住居址の北に住居址から約５～６ｍはなれて東西方向に溝があった。溝はDJ51～56区にわたって出土したが，なおDJ57区へと伸びているらしい。完掘していないので溝の性格ははっきりしないが，出土土器は大木８ｂ，９，10式が主であり，住居址より高い方にある事から住居址にともなう排水溝とも考えられる。竪穴を掘ることは，池をつくるようなもので，住居より高い方に排水溝を設け，竪穴の内部にも溝をつくって竪穴にたまる水を外に流すようにしなければ不衛生であり健康をそこなう。　　（八巻正文）

Ｂ．人工遺物

１．土器・陶磁器

出土した土器のうち復原した３点について述べる。

図５－１，図版Ｉ－Ａ－１はＦＧ60Ｌ１出土。大木８ａ式。胎土には石英粒を含む，器壁は８～10mm。口縁部断面の形はこの時期の特徴の１つで，口唇が内側に傾き，口縁部内面はやや湾曲している。装飾のある把手が４つつけられており，その文様は粘土紐で，ひし形とそれにつづく曲線文からなる。口縁部器面は，みがきのない断面ほぼ三角形の隆線が２本水平につけられ，そのため文様帯が２段になっている。上段には刻文が縦に並べられ下段では鋸歯状に施されて

いる。下の方の隆線の4か所にひし形の文様がある。その位置は把手と把手の間である。胴部には文様はなくよくみがかれている。口唇部最大径52cm。高さ17cm。色は内外とも，うす茶，褐，黒色などがみられる。底は石膏による復原。

図5－2，図版I－A－2はDF72L2出土。大木8b式土器。胎土には石英粒を含む。底は無文。器壁は4～5mm。器形はキャリパー形。口縁部には大突起が1つ，小突起が3つつけられ，文様の割りつけに役立っている。大突起を1つつけるということは芸術的にも高度で，この時期の特徴の1つである。頚部の無文帯によって文様圏は口縁部と胴部とにわけられる。口縁部では縄文LRが横方向にころがされ，そのあとで隆線を添付し，[1] その隆線の両側を沈線でふちどっている。隆線の頂部は平らにみがかれているので隆線の断面は四角である。このような隆線は大木8b式の特徴である。胴部には縄文LRが縦にころがされており，縄文施文の後に沈線文（巾2mm）が描かれている。このような沈線は大木8b式の代表的な文様であり，文様の全体図，その配置は図に示すとおりである。色は器内面は浅黄，外面は浅黄，黄橙。口縁部における最大径19.3cm高さ18.1cm。

図5－3，図版I－A－3，DF46L2k出土。大木9式土器。胎土には金雲母を含む。底部は無文。器壁は厚さ4～5mm。器形はキャリパー形。胴部には巾4mmの浅い沈線文が描かれており，器面同様ていねいにみがかれている。この沈線文で区画された中には縄文RLRが縦方向にころがされている。粘土がやわらかいときに縄文をころがしたらしく縄文が深く入っており目がつまっている。文様は図に示すように器面を2分する文様A・Bがあり，このA・Bの文様を中心にその左右に対称的にa，bの文様が交互に配置されている。沈線と沈線の間の巾は7mm以上あり，大木9式後半の様を示している。器面は内外ともていねいにみがかれており，色は橙，褐，黒褐色など。口縁部最大径21.5cm，高さ18.7cm。

さて時期がうつるにつれ器形にも次第に変化が認められる。たとえば目でみてこれは大木9式よりも大木10式の器形に近いなどと判断する。このような形のちがいを数値であらわせればさらにはっきりする。土器の屈曲点を結び器形を表わしたのが図4である。2つの土器を比較しやすいように，この図では，胴部最大巾のところcを一致させてみた。この図でみると図5－2の土器は図5－3の土器にくらべ頚部のすぼまりが強く胴部径に比し器高特にh_2が高いことがわかる。筆者が卒業論文で扱った大木9式土器では，下層から上層になるにしたがい特にβ或は$\tan\beta$の数値の変化に規則性をみいだすことができた。

時期や地域のちがいにより，以上のように角度あるいは高さや径の比に共通性や差違がでてくるはずである。

今c＝100として2つの土器の各部分の数値を示すとP.9上左の表のようになる。

1）隆線の剝落下に縄文がみられる。

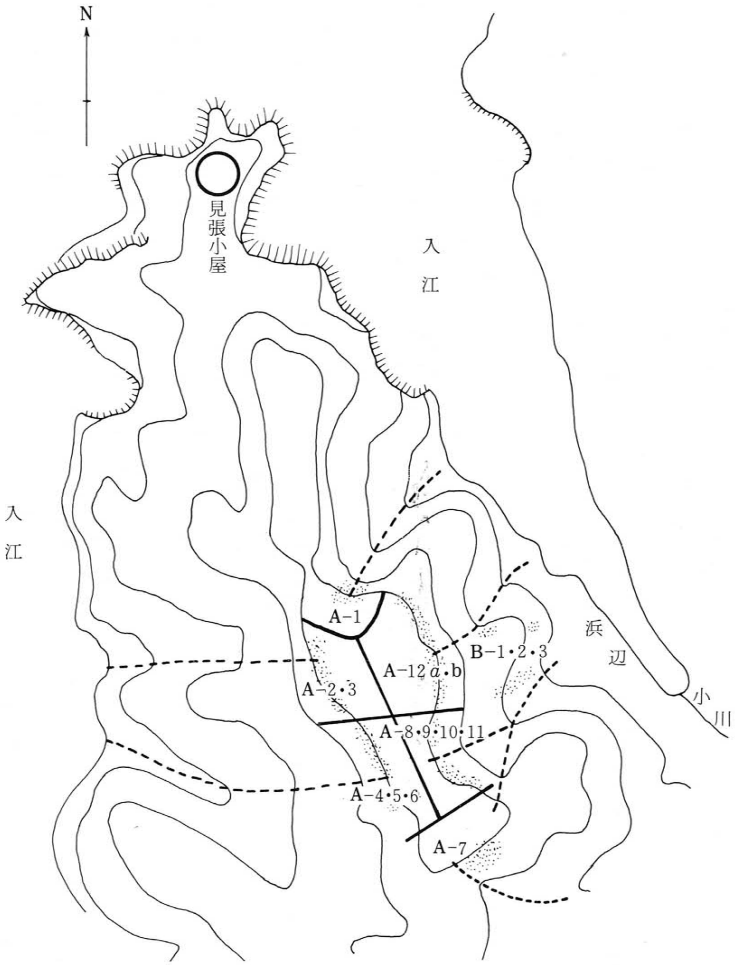


図3　大木囲集落における各家族への土地割想定図
太い実線が土地割、破線は小道
ドットは残滓などを捨てたところ（埋蔵貝層分布地域）

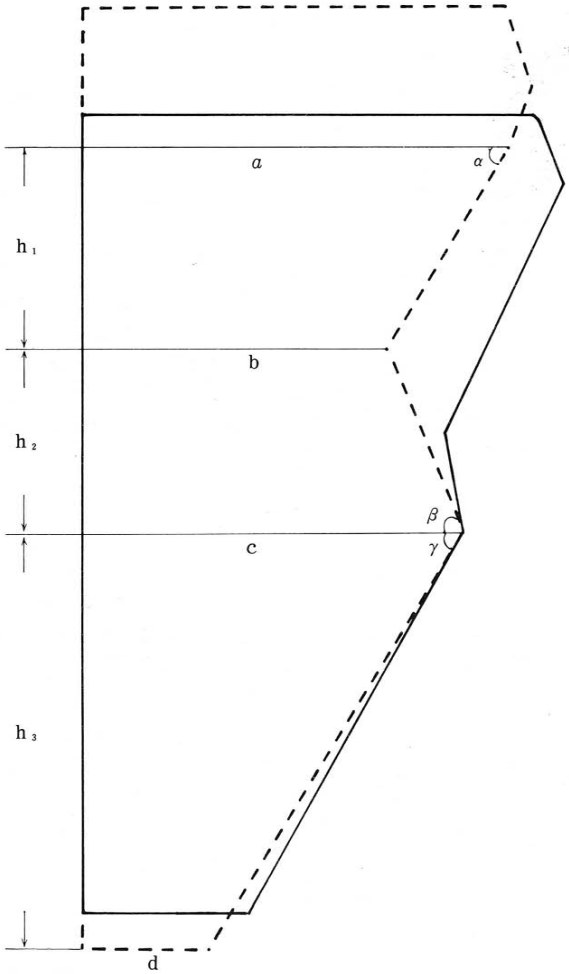


図4　破線は第5図の2、実線は3の土器――器形の
屈曲点を結び直線で器形を表わした

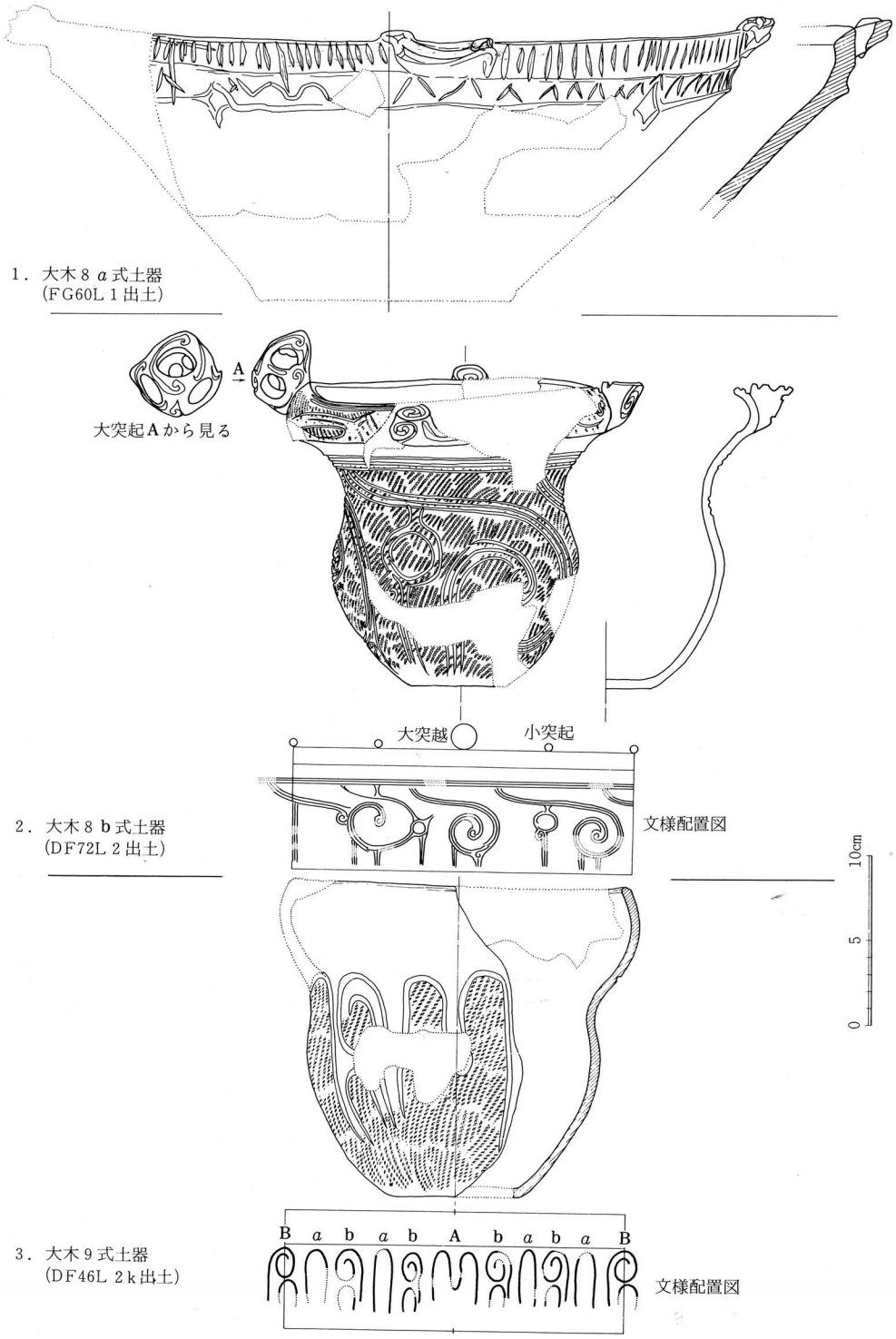


図５　大木囲貝塚出土土器実測図及び文様配置図

	図5－2	図5－3
α	59°	65°
$\tan\alpha$	1.6	2.1
β	68°	79°
$\tan\beta$	2.4	5.2
γ	58°	60°
$\tan\gamma$	1.6	1.7
a	112	126
b	80	95
c	100	100
h_1	52	65
h_2	48	26
h_3	108	99

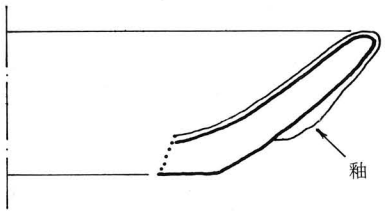


図6　志野陶片（実物大）

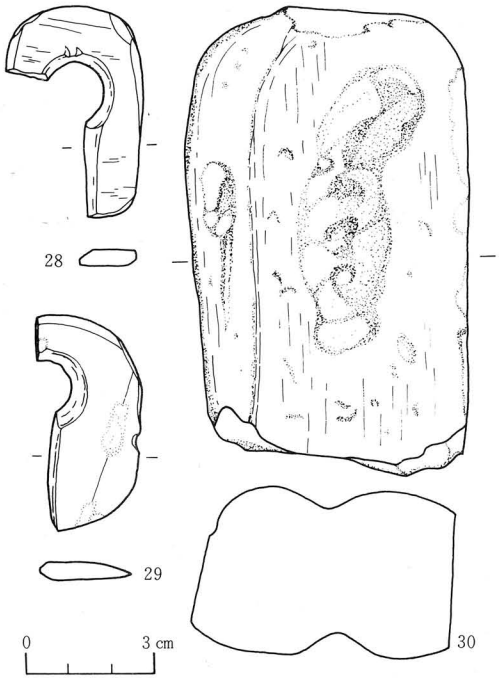


図7　石器実測図

なお土器実測図の表現は次のようにした。イ．影は入れない。ロ．欠失している部分は点線を用いた。ハ．隆線の剝落下に縄文のある部分には縄文とドットを併用した。ニ．断面図は必要に応じて半断面，破砕断面図，局部断面図を用いることにした。ホ．断面がわかりにくい場場合にはハッチングを用いた。ヘ．口縁部破片で半径の求められる場合には中心線を引いた。

中世近世の陶磁器片が今回の試掘で十数片出土している。図6，図版I－B－2は志野陶片でDI47L1から出土した。胎土には砂や小石は含まれていないが緻密な土ではなく，色は淡黄，底部にはロクロ痕がある。器形は浅鉢。文様はみられない。釉は厚くぽってりとしており，ところどころ釉がたれている。内側でも底部近くの釉は厚く，1mm強の部分もある。釉は内側はすべてかかっているが，外側底部にはない。刷毛跡はない。釉のかかった部分は灰白色で，器の外側には黒いプツプツが多い。釉のうすいところ，釉の端は緋色である。　（八巻正文）

2．石器・石製品

今年度の調査における各トレンチ出土の石器は，すべて表土およびその下位の層から出土している。良好な包含状態にあったものではなく，当然ながら土器型式との伴出関係も明らかではない（「発掘方法」，「調査経過」の項参照）。それゆえここでは各トレンチ出土の石器を一括し，代表的なものについて記述を進めることにしたい。なお各トレンチごとの出土数は第1表に示

してある。

石鏃（第８図１～９）

未成品を含めて86点出土している。その形態は，i)無茎で三角形を呈するもの（1），ii）無茎で抉り込みを有するもの（２・４・６～８），iii）有茎のもの（３・９），iv）無茎とも有茎ともつかない卵形を呈するもの（５）の４つに大別できる。有茎の石鏃は図示した２点のみで，無茎で抉り込みを有する石鏃が大多数を占めている。石材には頁岩，黒曜石，珪岩，流紋岩，めのうなどが用いられているが，頁岩製のものが多い。この傾向は石鏃に限らず，剝片石器全般に認められる。なおアスファルトの付着した資料はみられない。

○石錐（第８図10～12）

17点出土しており，つまみのあるもの（10・11）と無いもの（12）とに大別される。12の資料では尖端部が極度に磨滅している。

○尖頭器（石槍）

３点とも両面加工であるが，完形品は図示した１点だけである（第８図13）。これは細身の柳葉形を呈し，頁岩製である。

○石匙（第８図14～18）

横型（14～16）と縦型（17・18）とに大別されるが，前者は後者よりも少ない。16の資料ではつまみが左に片寄っているが，多くはほぼ中央に位置している。

○スクレイパー（第９図21・22・24）

前記の石匙もスクレイパーの一種と考えられるが，ここではつまみを有せず素材（剝片）の一側もしくは両側・全周に連続的に剝離を施して刃部を作出しているものをスクレイパーとした。形態的には不定形なものが多数を占める。なおスクレイパーと二次加工痕ある剝片（retouched flake）との分類の基準は剝離の連続性である。

○石篦（第８図19・20）

断面が蒲鉾形を呈する片刃状のものと，凸レンズ形を呈する両刃状のものとに大別されている（八幡 1935）が，４点とも後者に属するものである。19は基部が欠損している。

○石斧

４点とも磨製石斧で，緑泥片岩・粘板岩などが石材として用いられている。いずれも胴部のみの破損品であり，形態上の特徴は把握できない。

○凹石（第９図27・第７図30）

安山岩，石英粗面岩などが用いられている。30には３面に敲打によるくぼみがある。27には両面にくぼみがあるだけでなく，側面には磨痕があり磨石としての機能も考えられる。

○磨痕ある石

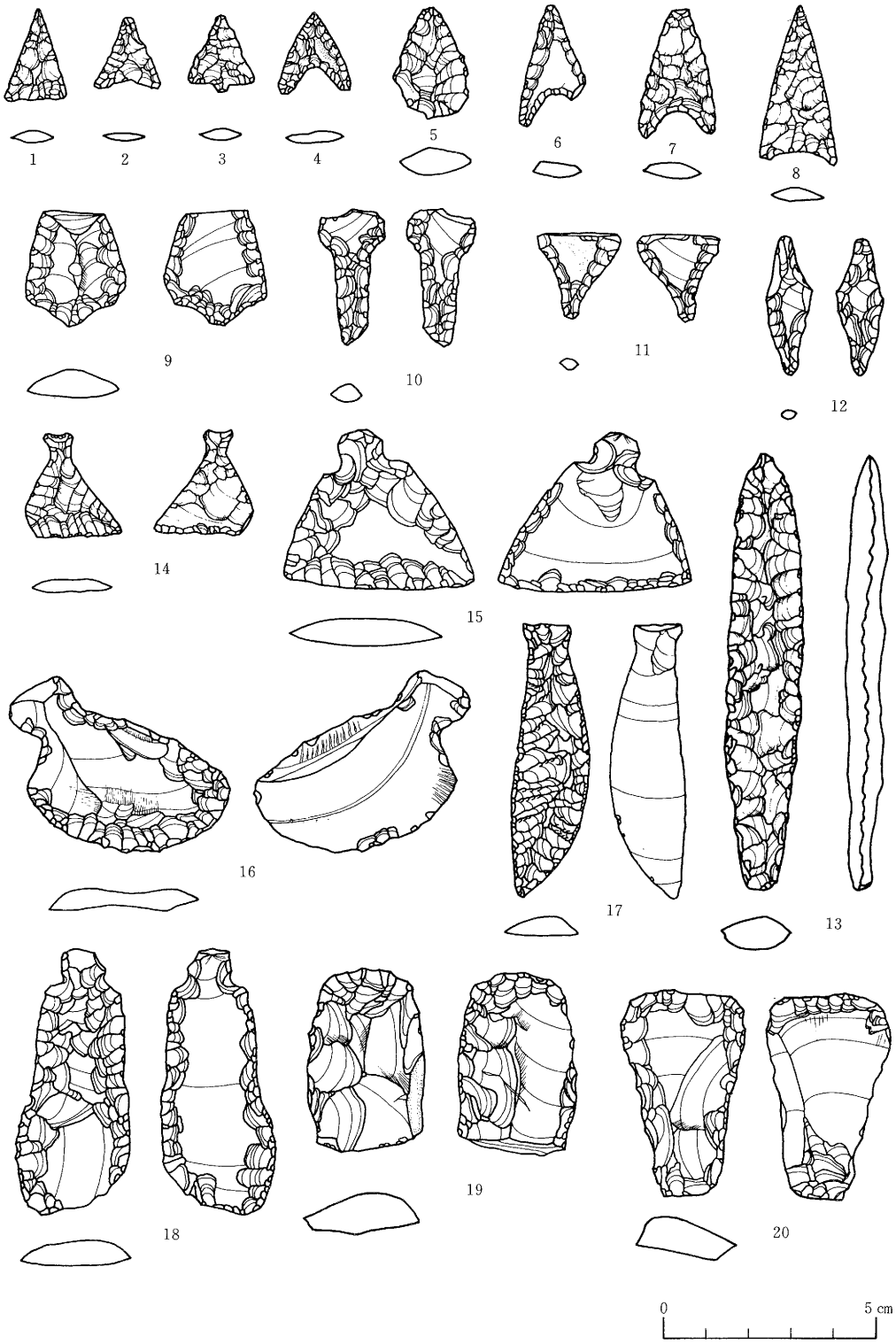


図８　石器実測図

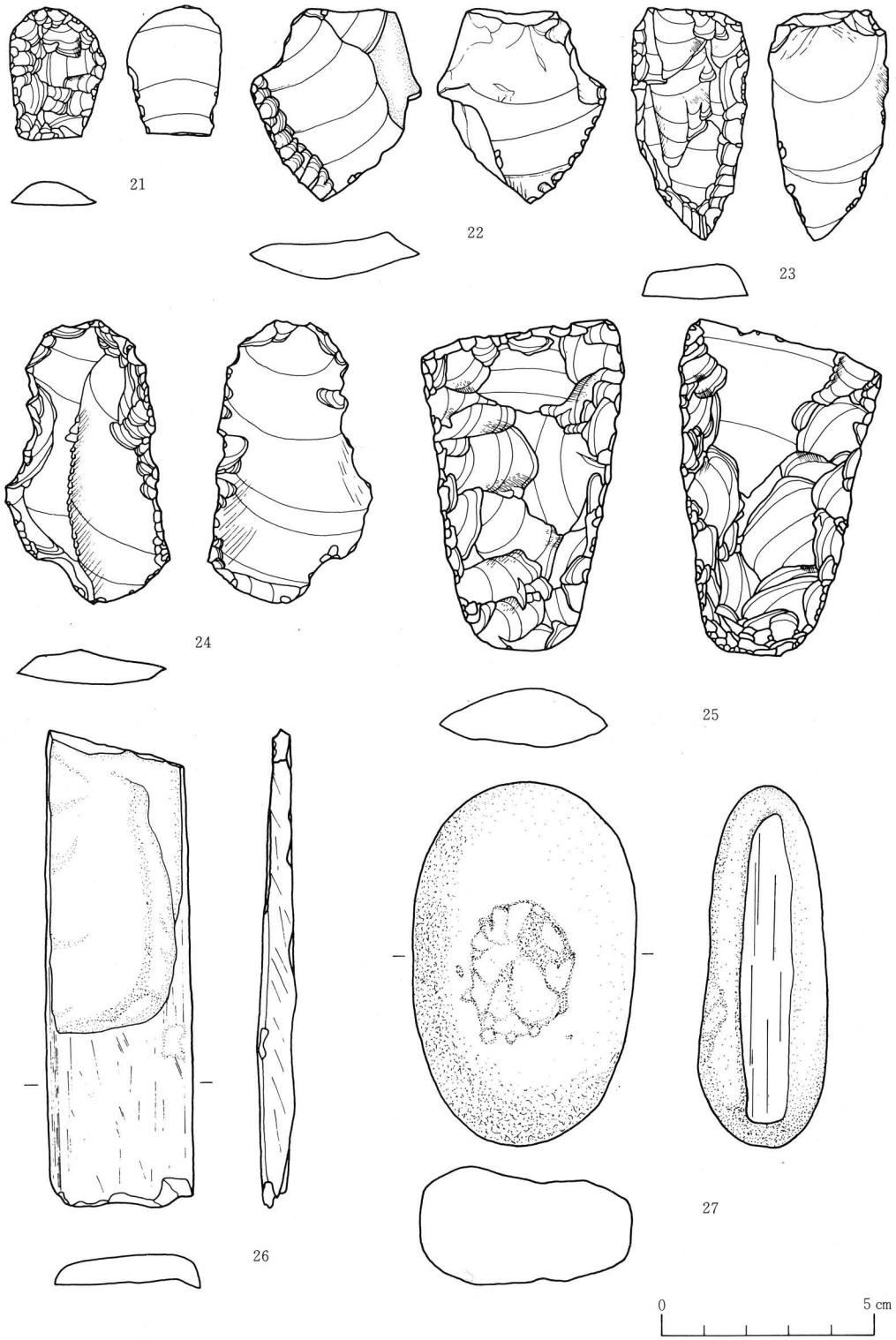


図 9　石器実測図

表1　各トレンチにおける石器の出土数

トレンチ / 石器名称	I トレンチ	II トレンチ	III トレンチ	IV トレンチ	V トレンチ	I 住居址	II 住居址	計
石鏃	28	5	27	5	9	8	4	86
石錐	6	1	2	2	2	2	2	17
尖頭器(石槍)	0	0	2	1	0	0	0	3
石匙	3	2	2	2	8	0	0	17
スクレイパー	3	2	7	7	6	1	1	27
石篦	1	0	1	0	1	0	1	4
ピエス・エスキーユ	0	0	1	0	1	0	0	2
石斧	1	0	2	0	0	1	0	4
敲石	7	0	1	3	2	2	1	16
磨石	3	0	0	0	0	1	1	5
凹石	5	0	1	2	1	0	1	10
磨痕ある石	17	2	3	3	2	2	1	30
石剣	0	0	1	0	0	0	0	1
剥片・石屑	353	138	184	229	137	42	71	1154
使用痕ある剥片 二次加工痕	76	14	27	44	37	15	17	230
石核	7	5	7	4	5	3	4	35
その他	4	1	0	0	0	0	1	6
玦状耳飾	3	0	0	0	0	0	0	3
計	517	170	268	302	211	77	105	1650

石皿・砥石・磨石などと考えられる石器の石片を含めた破損品を「磨痕ある石」として一括した。安山岩・石英粗面岩などが多い。

○石剣（第９図26）

緑泥片岩製。破損品のため石棒との区別が明瞭でないが，石棒に比べて扁平度が強いという基準からすれば石剣と考えられる。なお昭和47年度の分布調査の際に１点表採されている。

○その他

第８図25は大形の剝片を素材として，基部・両側縁に調整剝離が施されているが，刃部にはわずかの剝離が施されているだけで，第一次剝離面をそのまま利用している。一応トランシェ様石器と称しておく。頁岩製。

第８図23は急角度に刃部を作出して一端を尖らせている。スクレイパーの一種とも考えられるが断定できない。頁岩製。

○玦状耳飾（第７図28・29）

いずれも片側が欠損しているが，馬蹄形を呈する。粘板岩・緑泥片岩が石材として用いられている。

最後に，人為器ではないが珪化木が６点出土している。　（千葉英一）

３．骨角器

１）つりばり　図10－１，図版Ｉ－Ｃ－１

ＤＦ46Ｌ２から出土した。この層出土の土器片で型式の明らかな44点のうち33点が大木９式で，他は大木６，７，８式の土器片がわずかづつみられる。材料は鹿角。一本作り（one piece，単式）である。チモトには溝がまわっている。アゴ（カエシ，アグ）は内側に１つつけられている。ハリ先は内弯しており，正面からみるとやや左にひねりがみられる。つりばりの種類は現在日本では1,500種類に及ぶと言われるが，現在の名称で言えば大ダイ用つりばりである。ＤＦ46Ｌ２からはマダイの主上顎骨，口蓋骨が各１点づつ出土している。つりばりの大きさは高さ45.5mm，巾19.3mmである。このような型のつりばりは仙台湾付近の遺跡では大木９式のものが今のところ最も古い。楠本政助（1972）によれば石巻市南境貝塚の例も大木９式らしい。対象魚に適したハリを選ぶようになり，このようなつりばりが仙台湾でもつかわれるようになったのであろうか。魚は大木囲貝塚の人々にとって重要な食料であり，魚具の改良は重大であったろう。アゴがつけられた原因にはイ．魚が逃げやすいので改良した。ロ．魚が少なくなり改良をせまられた。ハ．流行して来たなど考えられる。マダイの前上顎骨と歯骨をあわせた数でその出土量をみると，大木２ｂ式土器が主に出土したＣＦ44Ｌ３では21点，大木９，10式を主に出土したＤＦ45Ｌ２とＬ３の合計は40点であり，しかもその大きさも大きい。そうすると縄文時代中期末になってもマダイは仙台湾で繁栄していたとみてさしつかえない。またつりば

りが改良された結果マダイの漁獲量が急にふえたわけでもない。

2）有孔牙飾　図10－2　図版Ⅰ－C－2

CF44区出土。出土土器は大木2a，2b，3式が主で大木8b，9，10式が少量出土した。

牙は *Canis hodohylax* Tem. 或は *Canis lupus hodohylax* Tem. の左下顎の犬歯と考えられる。歯根に孔があけられている。孔は両側からあけられているため断面が滑車形で，孔の壁には輪状にすじがついている。石錐の回転によりついたすじであろう。

葛生出土の *Canis lupus* は大きくがっしりしている。鹿間時夫（1949）による葛生の報告書の中に犬歯の比較資料があるので転載する。単位はmm。

		大木囲	葛生	*hattai*	Siberian wolf	*hodophylax*
C	長さ	13.4	14.0	13.5－15.0	14.5－15.5	13.0
	巾	9.1	10.2	10.0－11.0	9.0－ 9.5	8.5

大木囲貝塚出土Cの総高は50.7mm，歯冠高は23mmである。

宮城県内での類例としては，阿部　恵（1971)により報告された南最知貝塚出土の牙飾がある。

3）実測図の表現のしかた

以下に述べることに注意し表現した。

イ．影を線で表現すると人為的加工による擦痕を表現した線と混同するので影を入れない。

ロ．自然の面は自然のままに表現

ハ．磨かれた部分はドットをうった。

ニ．打割られた面に破壊による痕跡（リング・フィシャー）があれば表現するが，はっきりしない場合には何も描かず白いままにした。

ホ．人工の加わった線を強張した。　（八巻正文）

C．自然遺物

Ⅰ．貝　図版Ⅳ，Ⅴ

発掘における採取方法には次の3つの方法がある。

1）貝層を土を含めすべて収納する。貝層が二次堆積でなく第一等資料の場合にはできればこの方法をとりたい。

2）しかしすべて採取することは容易でないので一般には，ブロックサンプリングが行われている。ブロックは20×20，あるいは30×30cmなどがつかわれている。ブロックの位置は発掘区の角に設ける方法もあるが，貝層によってはその角にないこともおこりえる。したがって各貝層のそれぞれ最も保存の良い厚い部分にブロックを設けるのが良い。

3）貝層が2次堆積のように資料として良くない場合には発掘者が任意に授取しておく。

採取した貝はすぐ水洗いせずに自然科学の分析にまわすものは，必要な記録をとり，泥のついたままビニール袋に入れ，雨風にさらさないようにし，早く分析にまわす，などの注意が必要である。

分類は標本を用意して行った。この標本は石川政治（市立函館博物館長）が大木囲貝塚出土の貝を鑑定して下さったものである。図鑑は以下のものを主として参考にした。

波部忠重，黒田徳米，1967（昭42）新日本動物図鑑　中巻　第2版，北隆館

波部忠重　1973（昭48）続原色日本貝類図鑑　第12刷　保育社

吉良哲明　1973（昭48）原色日本貝類図鑑　改訂19刷　保育社

図鑑をみてもなお分類に疑問の残った貝を東北大学理学部地質学古生物学教室の野田浩司に鑑定を依頼した結果，イタヤガイ，ナミギセルガイ，ヒカリギセルガイなどが同定できた。図鑑を見てマルサルボウと思った貝（図版Ⅳ－11　）は野田浩司がサルボウであることを教えて下さった。

出土した貝は表2に示すとおりである。貝の名称は学名で示すのが学問上正確で便利であるが，イタリック体にするなど印刷が容易でないので学名は省き和名で表わした。和名は，前述した波部忠重，黒田徳米，1967（昭42）新日本動物図鑑，中巻，第2版　北隆館にしたがった。また，この図鑑により出土した貝の棲息場所，分布をしらべてみた（表2）。

ハイガイは現在日本では絶滅寸前であるが[(1)]，縄文時代には松島湾で繁栄していたらしく，出土数も多くＣＳ78c 区出土の貝の数をしらべた結果，二枚貝で多い順からハマグリ，アサリ，カリガネエガイ，マガキ，オキシジミ，ハイガイ，イガイ，シオフキ……であった。ただし大きいハイガイは少ない。小高民夫（東北大学理学部）はハイガイをつかって当時の水温を調べている。

チョウセンハマグリとウバガイは外洋に面した浅海の砂底に棲息する。大木囲の人々は住居のすぐそばの入江から貝をとるだけでなく外洋に面した代ヶ崎浜，吉田浜，花渕浜，菖蒲田浜，湊浜などに出かけて貝をとったこともあったらしい。今回の発掘ではチョウセンハマグリもウバガイも非常に少なかったが，貝塚東南部には地表にチョウセンハマグリがかなり散っている。

小池裕子（1973）はハマグリの貝殻成長線により，その貝が採集された季節を推定する研究を行っている。

---

(1)　野田浩司の御教示による。

表２　大木囲貝塚出土の貝―それぞれの説明は、北隆館の「新日本動物図鑑」中巻（昭和42年）を参考にした。

	ページ	解説者	棲息場所	分布
1．イシダタミ	31	黒田、波部	潮間帯礫底	北海道南部以南、インド、太平洋
2．コシダカガンガラ	32	〃	潮間帯岩礫底	カラフト、北海道西岸以南、台湾、シナ
3．クボガイ	32	〃	潮間帯岩礫間	本州（房総以内）、台湾、シナ
4．スガイ	38	〃	潮間帯岩焦	本州以南、西太平洋
5．ウミニナ	59	波部	潮間帯砂礫底	本州～九州、シナ、朝鮮半島
6．ツメタガイ	87	黒田、波部	潮間帯下の細砂底	北海道南部以南、西太平洋
7．イボニシ	106	〃	潮間帯岩礫底	北海道南部以南、西太平洋
8．レイシ	106	〃	潮間帯岩焦	本州以南、沖縄、シナ
9．アカニシ	104	〃	内海の潮間帯から水深20mの砂泥底	北海道南部以南
10．カリガネエガイ	223	波部	潮間帯の岩礫、内湾	本州（東北）以南に広く分布
11．サルボウ	225	〃	潮間帯より水深10mまでの泥底	東京湾以南、インド、太平洋
12．ハイガイ	226	〃	〃	本州、三河湾以南、インド、太平洋
13．イガイ	232	〃	潮間帯より水深20mの岩焦に足糸で付着	北海道南部～九州、朝鮮、シナ
14．イタヤガイ	241	〃	10～30mの砂泥底	北海道南部～九州、朝鮮、シナ
15．イタボガキ	246	〃	内海内湾の浅底の岩礫や岩焦に付着	本州、四国、九州、朝鮮、シナ
16．マガキ	71	黒田、波部	内湾の塩度の低い海域の潮間帯の岩焦に付着	カラフト、日本全土、朝鮮、シナ
17．ハマグリ	267	〃	内湾の潮間帯や浅海の砂泥底	北海道南部～九州、朝鮮、台湾、シナ
18．チョウセンハマグリ	268	〃	外洋に面した浅海の砂底	本州（房総半島）～九州、朝鮮、台湾、シナ
19．オキシジミ	269	〃	内湾内海奥部の潮間帯、砂泥底	本州、台湾、朝鮮、シナ
20．カガミガイ	268	〃	潮間帯下より水深10mまでの砂泥底	北海道南部～九州、朝鮮
21．ウチムラサキ	267	〃	潮間帯下部より40mの砂礫泥底	本州～九州、朝鮮
22．アサリ	275	〃	内海内湾の潮間帯から10mまでの砂礫、泥底	カラフト～九州、朝鮮、台湾、シナ
23．シオフキ	279	〃	砂泥の干潟	本州（房総半島以南）～九州、朝鮮、中華、台湾
24．ウバガイ	287	〃	外洋に面した浅海の砂底	本州（鹿島灘以北）、北海道、朝鮮、沿海州、オホーツク海
25．マテガイ	296	〃	潮間帯下の細砂底	北海道南部～九州、朝鮮
26．オオノガイ	299	〃	内海や内湾奥の潮間帯泥底	カラフト～九州、朝鮮
27．ヤマトシジミ	250	〃	河口など淡い塩分のある汽水域に主に生息する	カラフト、北海道、九州、朝鮮
28．ナミギセルガイ	194	〃	朽木落葉間	関東～中国、四国北部
29．ヒカリギセルガイ	196	波部	落葉下などに多い	本州中部以北
30．ヒダリマキマイマイ	208	黒田、波部	地上の落葉や草間に多い。平地の林野	関東、中部地方

松島湾の貝については野村七平，畑井小虎（1932）の報告がある。この報告の資料の大部分は塩釜で採集しているが１部外洋に面した七ヶ浜村産のものを含んでいる。

今回出土した貝のうち陸産のものを除いて，野村七平，畑井小虎（1932）の報告した貝の種類と対比すると，出土した貝の中でコシダカガンガラ，クボガイ，ウミニナ，ハイガイ，チョウセンハマグリ，ヤマトシジミが野村，畑井の報告中にはみられない。クボガイ，ハイガイ，チョウセンハマグリは今では当地よりずっと暖かな地方にすんでいる貝である。

２．魚　図版Ⅵ

大木囲貝塚では貝層よりも魚骨層が顕著である。

魚の種の査定では石山礼蔵（東京水産大学）上野輝彌（日本ルーテル神学大学）他多くのかたがたに魚骨をみていただいた。また魚について水産庁東北区水産研究所の佐藤重勝，小達繁に多くの御教示をいただくとともに貴重な文献を石山礼蔵及び水産研究所から借りることができた。特記して謝意を表する。

出土した魚は次の通り。

１）ミズワニ属 *Odontaspis* 図版Ⅵ－１

種の同定は上野輝彌。ＤＦ80Ｌ１出土。伴出土器は主として大木９，８ｂ，10式。その他大木各型式土器片が少数づつ出土。このサメの歯は側咬頭を持つ。歯頸の両端は歯根の両端まではのびておらず歯冠基部は短い。孔溝はあまり深くない。歯冠先端がわずかに欠けている。ＤＦ80Ｌ１出土。

外側面歯冠長10.8＋α mm，内側面歯冠長12.3＋α，咬頭頂から歯頸後端間距離13.3＋α（側咬頭を入れない場合11.6＋α），咬頭頂から歯頸前端間距離13.85＋α（側咬頭を入れない場合12.8＋α），歯牙最大高19.4＋α，咬頭頂から歯根前部先端間距離19.4＋α，咬頭頂から歯根後部先端間距離17.65＋α，歯根高3.5，歯冠幅9.8（側咬頭を入れない場合7.1），歯根巾14.15，歯冠厚4.85。

トビエイ科 Myliobatidae　図版Ⅵ－２

ＤＦ46b（攪乱地区）歯下面，参考資料として東北大学理学部標本室No.37206がある。

ボラ科 Mugilidae　図版Ⅵ－３

主鰓蓋骨，マボラの頭骨については Gregory. W. K.（1933）参照。メナダの標本もつくり比較したが，主鰓蓋骨ではマボラのかメナダなのか区別ができなかった。

スズキ　*Lateolabrax japonicus* C. & V.

前上顎骨（図版Ⅵ－４－ａ），歯骨（図版Ⅵ－４－ｂ）

東北大学理学部標本室には骨格全体を組立てた標本がある。

クロダイ　*Mylio marcrocephalus* B.

前上顎骨（図版Ⅵ－５－ａ）主上顎骨（図版Ⅵ－５－ｂ）歯骨（図版Ⅵ－５－Ｃ)。マダイに次いで出土量が多い。

マダイ　*Chrysophrys major* T. & S.

前上顎骨（図版Ⅵ－６－ａ，枝の長さ53.4mm)，主上顎骨（図版Ⅵ－６－ｂ）歯骨（図版Ⅵ－６－Ｃ枝の長さ65.5＋α mm)，尾舌骨（図版Ⅵ－６－ｄ）については草下孝也（1969）参照。出土したマダイの骨は大きいものが多いがほとんどの骨は破損しているので簡単に計測値を示せるものはほとんどない。

イシダイ　*Oplegnathus fasciatus* T. & S. 図版Ⅵ－７

前上顎骨。石山礼蔵の手紙は次のように話している。「巨大な上顎骨２コはイシダイ *Oplegnathus fasciatus*（Temminck et Schlegel）と同定します。当方のブダイ，イシダイ，イシガキダイの骨格標本と比較した結果，明らかにブダイ科ではありません。イシダイとイシガキダイとよく似ていてどちらとも決しかねたのですが標本と比較し，他とも論議した処，イシダイと決定しました。昔はこんな大きなイシダイが沿岸に居たのでしょう。」

メバル　*Sebastes inermis* C.

石山礼蔵の手紙は次のように話している。「前上顎骨２はメバル *Sebastes inermis*（Cuvier et Valenciennes）と同定します。当方の骨格標本と比較測定した結果です。」

マゴチ　*Platycephalus indicus* L. 図版Ⅵ－９

左の前鰓蓋骨。参考文献として Kiyomatsu Matsubara and Akira Ochiai（1955）がある。

トラフグ　*Fugu rubripes rubripes* T. & S. 図版Ⅵ－10

歯骨。石山礼蔵の手紙は次のように話している。「下顎（３コ），上顎（１コ）は明らかにフグ属 *Fugu* です。中でもトラフグとマフグのいずれかではないかと思いますが，当方の骨格標本と詳細に比較検討した結果，トラフグに一番近いかと思います。大きさから考えてシマフグとも比較しました。３種とも卵巣は猛毒ですが当時の人々はすでにフグの美味なことを知って居たのでしょう。毒のないサバフグかとも思いましたが，骨の頑丈な点で符号しません」

クロマグロ　*Thunnus thynnus* L. 図版Ⅵ－11

石山礼蔵の手紙は次のように話している。「この尾部扇状骨（２コ）は最初カジキ類かと思いましたが，マグロ科であることが判明しました。現在マグロ科魚類７種のうち，ホンマグロ *Thunnus thynnus*（L.）ではないかと思います。遺憾ながらホンマグロの骨格標本がないので，最後的な確定が出来かねます。大きさから考えてもカツオのではありません。塩釜，石巻はホンマグロの産地でありますから，魚屋，料理屋などに依頼して不要な尾部を譲りうけて，その骨格と比較していただくのが一番よいと思います。」

出土した魚のうちではマダイが圧倒的にその数が多い。しかしだからといってマダイを最も多くとったと言えるであろうか。骨でもくさりやすいもの，小さくて犬などが容易に食べてしまうもの，道具の材料につかわれるものは残りにくい。タイ類の頭骨でも，多く出土するのは，前上顎骨，主上顎骨，口蓋骨，前鰓蓋骨，関節，方骨などであり，他の薄い骨，柔らかい骨，もろい骨は余り残っていない。骨がおかれた環境，発掘の方法，採取の方法のちがいによっても数はちがってくる。

マダイの骨は縄文時代前期中期を通じて大形である。つりばりが大きかったせいもあろうが，マダイが当時松島湾で繁栄していて大きいのがたくさんいたので大形のつりばりがつかわれたのであろう。モリあるいはヤスによる刺突痕を確認することはできなかった。貝類は非常に小さいものまでとっているのにくらべ対象的である。

最近季節変化と人間生活とのかかわりあいの研究が盛んである。マダイの釣り期は3月から11月である。落合　明（1973，P.709）によれば瀬戸内海の香川県福田，安田，坂出，三本松におけるマダイの最多漁獲日は，4月20日前後と5月2～3日である。松島湾内における魚類目録及びその年間出現期とその多寡については，谷田専治，堀田秀之，菅浪晋一郎（1957）の論文がある。この論文によれば湾奥の九ノ島地先の箕建に於ける漁獲の資料によって次のような事実が明らかになっている。

スズキ，ボラ，クロダイは秋季から冬季の水温低下に伴い，湾内から湾外に移動する。[(1)] 小達繁の御教示によれば，縄文時代は水温が今より少し高かったとしても，やはり移動したはずであるという。繁殖のため一時的に湾内に入ってくる移動性魚類には次のものがある。

春季　ドチザメ，マイワシ，イシガキダイ，ヒガンフグ，コモンフグ，コチ，ヒラメ

夏季　アカエイ，ショウサイフグ

冬季　ケムシカジカ

落合　明（1973 P.708～709）によればマダイの生息場は海底が岩礁または砂礫質で起伏に富み，水深30～150m，海水の流通が良好で，沿岸水の影響が大きく，冬季の最低水温が8～15℃であるような条件を備えていることが必要である。現在の松島湾は海底泥土が厚く堆積し，水深は浅く，冬季の最低水温は佐藤勝重，佐々木実，菅野　尚（1965）によれば4.7°（塩釜における昭和28～37年の1月の平均水温）であり，マダイがとれることは珍しい。

3．四肢動物

貝類と同様，資料の良し悪しにより3段階の採取方法が行われた。頭骨は破損しやすいのでとりあげる時注意を要する。同一個体と認められるものは他のものをまぜないで1つの袋に収納し

---

(1)　クロダイは親魚だけ移動し，幼魚は残留する。

た。歯が抜けやすいものは土中からとりあげる時及び水洗いをする時歯が抜けてしまわないように注意した。発掘の際は骨をいためないように，地下たびやズック靴をはき，キャラバンシューズははかないようにした。発掘用具も金属製のものでなく竹べらや箸が良い。

発掘は金子浩昌（早稲田大学）の御指導をいただいた。

種の鑑定については鹿間時夫（横浜国立大学）の御指導をいただいた。鹿間によれば鑑定のできる人は日本でも数少く，鑑定しようとすれば時間がかかるし，標本がそろっていないという。標本には成長したオス，メス，子の３体が少くとも必要である。しかも個体差もある。

考古学の報告書の多くは資料としてつかえるものは少い。いたずらに学名をつかっているものや骨についての記述がない報告書が多い。鑑定の専門家でない場合には，専門家に鑑定していただきその専門家の氏名を明記することによってその報告書の信頼度が高まるのであるが，鑑定者が誰か書いていないうえ，骨についての説明や測定値，学名を決定した根拠を書いていない報告書が大部分である。

なお国立科学博物館分館（長谷川善和の好意による）及び東北大学理学部地質学古生物学教室（小高文夫，森　啓，野田浩司の好意による）で貴重な標本や文献を見せていただいた。特記して謝意を表する。

出土した動物は，ウミガメ科，マイルカ科，ネズミイルカ科，イヌ，ヤマイヌ，タヌキ，アナグマ，カワウソ，アシカ科，イノシシ科，ヒトなどである。ウミガメ科の遺物については，松本彦七郎（1930　P. 37）が大木囲貝塚から *Caretta olivacea*（E.）が出土したことを報告している。アシカ科については金子浩昌（1968）の報告がある。

ここでは今回出土したもののうち一番良い資料であるイノシシ科の頭蓋骨について述べる。

イノシシ科　Suidae　図版Ⅶ

ＣＦ44Ｌ４から出土した。伴出土器は大木２ｂ式が大部分で他に大木２ａ，３式が少数出土した。

この頭蓋骨は前顎骨，顎骨，鼻骨，涙骨，前頭骨，口蓋骨が残存している。歯は左側では，I_{1-2}，$C-M_3$があり，I_3は歯槽がある。M_3の後部の歯冠はやや欠けている。右側ではI_{1-2}，C，P_4，M_{1-3}の歯があり，I_3は歯槽が残っている。P_{1-3}歯冠部が欠けている。

前頭骨と鼻骨間の縫合線，鼻骨後部の縦に走る縫合線，前頭骨の縦に走る縫合線は消えている。歯はすりへっている。成獣の雄である。

東北大学理学部地質学古生物学教室で，青島出土の *mikotonis*，響出土の *teizan*，宝ヶ峰出土の *teizan*，葛生出土の *lydekkeri* 等を見せていただいたのでこれらと比較しながら以下記述を進める。

まず頭蓋の測定値は以下のごとくである。単位はmm以下は四捨五入した。

前頭骨の中心線の先端の点から顔面における鼻骨の先端までの長さ	220
眼窩の前端から鼻骨の先端までの長さ	286
側頭窩の前端から鼻骨の先端までの長さ	275
前顎骨の斜めの長さ	175
前頭骨にある経線状の２本の溝の距離の最小値	27
同上の溝の長さ	107
鼻骨の最大巾	48
Ｃ直前の緊縮部における吻の巾	55
P_4の後部における吻の巾	55
眼窩下孔における吻の巾	54
Ｃの稜上における鼻口部の巾	105
Ｃの上にある稜の長さ	55
I_3の内側における口蓋の巾（歯槽縁における最小値を測定した）	45
Ｃにおける同上	48
P_3における同上	49
M_1における同上	42
M_3における同上	34
左右のM_1を含めた口蓋の巾（最大値、歯は歯槽縁において測定）	82
M_2における同上	86
M_3における同上	88
前口蓋孔間の横のひろがり（最大値）	19
前口蓋孔の長さ	20
顎骨の高さの最高値（歯槽縁から）	82

以上の測定値をみると，大きさでは松本彦七郎（1930　pp. 85－90）によって報告された響出土の *Sus nipponicus* Matsumoto *teizan* とほぼ同じで巨大である。しかし非常にちがってみえる特徴は，響の *Sus* の鼻が平べったいのに比し，大木囲貝塚の鼻は細長いことである。この特徴を測定値で表わしてみよう。P_4の後部における吻の巾と顎骨の高さの最高値との比に100をかけた値は，青島の *mikotonis* が101，響の *teizan* が103，大木囲貝塚のが67である。手もとにある現在のブタの標本では55である。C. C. Young（1932）によって報告された周口店の

lydekkeri の特徴の１つとして鼻が平べったいことがあげられる。

歯の測定値を以下にあげる。

		長さ	はば
I_1	右	15.2	9.0
	左	15.8	8.9
I_2	右	15.2	6.6
	左	17.3	5.8
I_3 歯槽			
	右	8.0	8.3
	左	9.4	8.0
P_1	右	10.9	5.0
	左	9.5	5.8
P_2	右	12.4	8.3
	左	13.0	9.0

		長さ	はば
P_3	右		10.8
	左	14.6	11.4
P_4	右	12.8	14.7
	左	13.0	14.0
M_1	右	17.3	19.3
	左	17.3	19.4
M_2	右	24.3	23.0
	左	24.5	22.6
M_3	右	40.8	25.2
	左	41.8	25.4

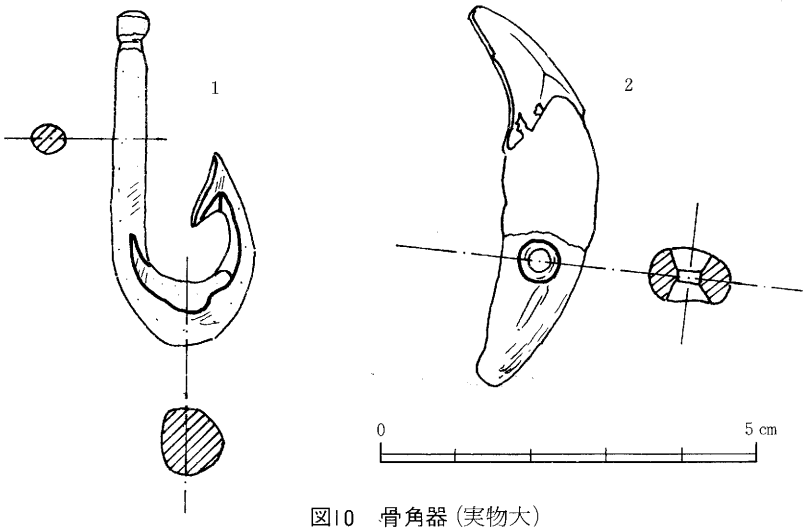


図10　骨角器（実物大）

I_{1-2} は周口店のにくらべやや小さい。P_1 は周口店のにくらべずっと小さい。P_{2-3} は響出土の *teizan* のそれとほぼ同じ測定値を示している。M_3 の大きさは周口店の *lydekkeri* のそれと同じくらい大きい。しかし歯の大きさには変異がある。たとえば周口店の *lydekkeri* の臼歯のL／W×100の値をみると，M_1 の最小値は91，最大値は117。M_2 の最小値は108，最大値は124。M_3 の最小値は163，最大値は181である。大木囲貝塚出土の頭蓋骨のL／W×100と他の *Sus* の値を比べてみると以下のごとくである。

		大木囲	青　鳥	響	葛　生
			mikotonis	*teizan*	*lydekkeri*
M_1	右	89	109	120	
	左	89	106	116	83
M_2	右	105	116	124	
	左	108	116	117	95
M_3	右	161	180	171	
	左	164	180	171	167

なお葛生の資料は葛生の Reg．No.61685の歯槽で測定している。青島は Reg．No.59935。響は Reg．No.59934である。

大木囲貝塚出土の頭蓋骨のL／W×100の値は，葛生の *lydekkeri*（Reg. No.61685）の率や周口店の *lydekkeri* の率の最小値に近い。しかし *Sus nipponicus* M. の場合にもこの率の値に変異があり，大木のL／W×100が，１つの種の中で最小値に近く，響の Sus の率が最大値に近いとも考えられる。したがってL／W×100の率 *lydekkeri* と同じだからと言って，「大木囲貝塚の頭蓋骨は *lydekkeri* である」とは言えない。

Ｃのエナメル帯は下部に１すじあるだけで，そのはばは16mm（最大値）である。測定値は次のとおりである。

	長　さ	巾	総　高
右	30.4	21.7	81.6
左	29.5	21.0	79.1

前臼歯列長	右	50.8
	左	50.2
臼歯列長	右	79.9
	左	80.6
M_3 の歯槽後端からＣの歯槽前端までの長さ（C－M_3）		175
M_3 の歯槽後端からP_1 の歯槽前端までの長さ（P_1－M_3）		128.5

臼歯列長は青島（右73，左75）や響（右76，左76）のそれより長く，周口店の *lydekkeri* のそれ（84mm）よりも短い。

鼻骨の後端の位置をみると，周口店の *lydekkeri* ではM_1の前端まで伸びているが，大木囲貝塚の資料ではP_1とP_2の間にあり，響出土の *teizan* ではP_2の上にある。

後口蓋孔の位置は周口店の *lydekkeri* ではM_3の第1葉と第2葉の間にあり，大木囲貝塚の資料ではM_3の第2葉前部から第1葉にかけてあり，青島の *mikotonis* ではM_3にある。以上の3例では後口蓋孔の位置が次に述べる2例にくらべやや後に位置している。響出土の *teizan* ではM_3の第1葉からM_2の後葉にわたっており，宝ヶ峰出土の *teizan*（Reg. No.59940）ではM_3の第1葉中部からM_2の後葉にわたって位置している。

眼窩下孔の位置をみると，周口店の *lydekkeri* ではM_1の前根のところにあり，宝ヶ峰の *teizan* 及び青島出土の *mikotonis* ではM_1の中ほどからP_4の前根に位置しており，響の *teizan* ではM_1の前根からP_4の前根にあり，大木囲貝塚の資料ではM_1の前根からP_3とP_4の間に位置する。

以上から判断すると，大木囲貝塚のイノシシ科の頭蓋骨は響出土の *teizan* に最も近い。類似点は次のとおり。

全体の大きさが巨大である

P_{2-3}の長さと巾

鼻骨の後端の位置

眼窩下孔の位置

しかし大木囲貝塚のものが，*lydekkeri* や *Sus nipponicus* MATSUMOTO とちがう点は，鼻がそれほど平べったくないことである。したがって大木囲貝塚出土の資料は *Sus nipponics* M. *teizan* に最も近いが，学名を決定することができなかった。

大木囲貝塚の脳筐部は脳を食べたため割られてしまったのかもしれない。

鹿間時夫（1949　p. 80）によれば，このような巨大な *Sus* は本州においては更新世中期に突然出現し，新石器時代になると大きさも大きく，数も多くなったという。特に東北地方には多く，大木囲の人々の食生活は魚類，貝類，シカ類，イノシシ類の動物に主として支えられたのであろう。

Sus nipponicus M. については松本彦七郎（1930）が詳細に報告しているので参照されたい。

4．鳥

鳥類の骨もかなり出土している。標本をつくりながら検討したが種の同定はむずかしい。現在国立科学博物館分館で査定していただいている。

松島における鳥については田中完一，竹丸勝郎（1970）の報告がある。

5．糞　石

今回の試掘の結果18点の糞石を得ることができた。図版Ⅰ－D－1は，断面にたくさんの魚骨がみえる。図版Ⅰ－D－2は完全品で長さ45mm，長径20mmで，骨は図版Ⅰ－D－1の資料ほど著しくない。

長谷部言人（1919）は，大正7年大木囲貝塚から糞石を発掘したことを報告し「其魚骨を包蔵するを以て察するに人の住所に近く出没し或は飼養せらるる食肉獣の糞の化石せるものなるべし」と論じている。長谷部は糞石の定性分析を嘱し，その結果についても述べている。

一方古生物学では，糞石の形によって動物の種類を推定する研究がなされて来た。(Walter, H. et al. 1968)

ところが最近糞石が人類のものか他の動物のものか区別できる方法が開発された。これは，Eric O. Callen（1967）により開発された方法で糞石の中からは，種子，植物の結晶体，花粉，葉，動物遺存体（毛，骨，殻，ウロコ），寄生虫の卵，ダニ類などが発見され，当時の食物，人々の健康状態，調理の技術，居住していた季節，生活環境などが明らかにされてきている。

しかし人間の糞は，よほど特殊な状況におかれないとくさってしまう。また Callen らの方法は有機質が残っていないとできないから，アメリカの乾燥地帯の資料でもせいぜい2,000 年前くらいまでしか反応しない。まして大木囲貝塚の糞石に Callen らの方法をとっても人の糞かどうかはわからないであろう。人骨の腹の部分に糞石が消化器官の形になって出土すれば人のものであろうが，犬の糞などがまぎれ込む可能性があるので注意せねばならない。(八巻正文)

III. 分布調査（図11）

A. 調査地域

昭和47年度に調査員福田友之によって行われた「ボーリングによる埋蔵貝層分布調査」地域の外の地域の調査を行った。但し沼地は除く。沼地は昭和49年度にボーリング調査を行う計画である。調査面積約135,000㎡

B. 目　的

3つの大きな目的を持って調査を行った。1つは環境整備を行うにあたり，どこにどんな施設をつくるか等全体計画をつくる為の基礎資料の作成である。この点で分布調査は他の事業に先がけ行うべきであった。また大木囲貝塚を全面発掘することは容易でないので，集落の想定や大木囲の歴史の概略をつかむには分布調査が必要である。また今後さまざまな発掘が行われようが，この分布調査により，発掘の目的に応じて発掘地点をある程度限定できるようになる。

C. 方　法

史跡の概略を早く知ることが必要なので試掘はせず地表における遺物の散布状況の調査及びボーリングによる埋蔵貝層（或は遺物包含層）の確認調査を行った。

D. 経　過

笹やフジ，クズのつる，雑木が繁茂している地域は入っていくことさえ容易でなかった。刈払いは人夫が鎌により，私が刈払機で行った。刈払機をつかうと1日1,500～2,000㎡刈払うことができた。しかし重労働であり，危険であるうえ，笹にあたるとすべって切りにくく，密林では動きがとれなかった。はじめ面で刈払っていたが能率が悪く線（調査の地区設定の為の方眼線）で刈払っていった。しかし夏，密林の中は昼なお暗く，人夫がこわがって進まないので一時中止し，秋から冬に再度行った。除草剤もつかってみたがねだんが高く，水を運ぶのがたいへんで，火事になりやすいし，桜の木などを枯してしまった。しかも雑草はなかなか枯れなかったので中止した。分布調査は雑草が繁茂していない土地買上げ直後，或は畑で遺物がみえやすい時行うべきである。

刈払う線の設定はトランシットを使用した。トランシットを基準杭上に立てポールで方向をみてその線を刈払いそのあと15m間隔で太い杭を打ち，杭には地点名を記入した。

調査はまず地表に散布している遺物を地形図に記録し，次に貝の散っている地域はボーリングにより埋蔵貝層があるかないかをしらべた。ボーリング棒は1mの長さのソイルオーガー及びスクリュー型ソイルオーガーを使用した。さらに15mごとに，地区割の基準点でボーリングを行った。

E．結　果

表面採集では，てらやまから近世の陶磁器片，瓦片が採集された。WGA25地点付近から須恵器片が採集された。

貝殻は史跡内のあちこちに散布しているがボーリング調査により埋蔵貝層が発見されたのはEA00～05の付近だけだった。この埋蔵貝層を福田友之（1973）のA，B貝層群の呼称にならい，C埋蔵貝層と名づける。[1] DK15地点付近の平地にはおびただしい貝殻や土器片が散布している。しかしボーリング調査では埋蔵貝層は確認できなかった。これは台地の高い方から流されたものであろう。

大木囲の丘の北部は，切立った崖になっている（図3参照）。そのためであろう貝塚は平らな浜のある丘の奥部に形成されている。また天然の要害にもなっており，丘陵先端には見張り小屋があったかもしれない。

F．勧　告

前述したとおり，調査したところは刈払った地区だけであり，調査の為の地区割の方眼線からはずれた地域には遺構がないとは言えない。また方眼線で刈払った地区でも枯葉などが厚く堆積していたところにも遺物がかくれているかもしれない。検土杖は1mであり1m以上深いところには埋蔵貝層がかくれているかもしれない。したがって工事の際には事前調査が必要である。

草木の伐開には最も苦労した。余り刈払わなくとも良いように環境整備する必要がある。それには苑路を整備し常緑樹を植えるのが良い。苑路は人が歩けば草ははえないし，常緑樹を植えれば下草も余りはえなくなる。[2] 枯草は山火事の危険もあり，地境界は刈払わねばならない。また歴史公園なので適当な場所に広場が必要である。貝塚のある台地は盗掘などを防ぐなどの管理の便からも雑草を刈払い見通しを良くせねばならない。この地域は縄文時代には住居があり，森になっていたと考えられるので，見通しが悪くならない程度に植栽する必要がある。

史跡の整備は開発著しい七ケ浜町において，緑地として，公園として重要になっている。したがって植栽は欠くべからざるものであるが，貝塚のある中央台地には，単に木をうえるのではなく，縄文時代の人々の生活とかかわりの深い木を遺構のないところに植えるようにするのが良い。史跡内には山菜も多く訪れる人も多い。クリやクルミなどの果実のなる木をうえ，入場料をとって山の幸の狩りを楽しんでもらうのも良い。維持，管理を考え，七ケ浜町の住民が活用できるような環境整備をする必要がある。　（八巻正文）

1）この地区から尖底土器片が採集された。縄文晩期の製塩土器である。

2）明治神宮では植栽以来余り手入れはしていない。

あ と が き

昭和48年度の環境整備に当って，多くの方々から指導，鞭達をいただいた。銘記して謝意を表する。

指導委員

伊東　信雄　東北大学名誉教授

芹沢　長介　東北大学教授

加藤　　孝　東北学院大学教授

岡田　茂弘　宮城県多賀城跡調査研究所所長

興野　義一　日本考古学協会員

佐々木嘉彦　東北大学教授

丸田　頼一　日本大学講師

協力機関

文化庁記念物課，宮城県教育庁文化財保護課，加曽利貝塚博物館，七ケ浜町中学校，七ケ浜町文化財保護委員会，七ケ浜町教育委員会，七ケ浜町公民館，七ケ浜町役場

引 用 文 献

アルファベット順に並べた。原著者のローマ字つづりが不明の場合，ローマ字は訓令式を採用した。

阿部　　恵　1971（昭46）宮城県南最知貝塚出土の牙製垂飾品，仙台湾創刊号，仙台湾刊行会，pp. 20—21

Callen Eric O. 1967（昭42）Analysis of the Tehuacan Coprolites, The Prehistory of the Tehuacan Valley I, Environment and Subsistence, edited by Douglas S. Bycrs. University of Texas Press. pp. 261—289

Gregory W. K. 1933（昭8）Fish Skulls, A Study of the Evolution of Natural Mechanisms Amer, Phil. Soc. p. 263

長谷部言人　1919（大8）石器時代遺跡に於る糞石，人類学雑誌34（11・12）pp. 394—396

福田　友之　1973（昭48）史跡　大木囲貝塚環境整備調査報告書Ⅰ，七ケ浜町文化財調査報告書Ⅰ，宮城県七ケ浜町教育委員会pp. 19—20

金子　浩昌　1968（昭43）縄文石器時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について—宮城県大木囲貝塚の出土例を中心として—仙台湾周辺の考古学的研究，宮城教育大学歴史研究会pp. 160—190

Kiyomatsu Matsubara and Akira Ochiai 1955（昭30）A Revision of the Japanese Fishes of the Family Platycephalidae (the Flatheads), Memoirs of the College of Agriculture, Kyoto Univ. 68p. 32

小池　裕子　1973（昭48）Daily Growth Lines of the Clam, *Meretrix Lusoria* —A Basic Study for the Estimation of Prehistoric Seasonal Gathering —J. Anthrop. Soc. Nippon 81pp. 122—138

草下　孝也　1969（昭44）魚類の顔面骨の研究－I. 100魚種の尾舌骨（Urohyal）の形状について　うみ7（2）　日仏海洋学会誌pp. 126－143

楠本　政助　1972（昭47）先史，矢本町史Ⅰ，矢本町史編算委員会　p. 253

Matsumoto Hikoshichiro 1930（昭5）Evidences of the Post-Glacial Cycle of climatic Change in North Eastern Japan based upon a Study of the marine Molluscs and Mammals from the Sites at Daigi, Miyagi District, at Hibiku, Mono District, and at Miyato Island, ditto, all, Province of Rikuzen Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. ser.2 13(3) pp. 35－44 PL. X1－XV

Matsumoto Hikoshichiro 1930（昭5）On a New Race of *Sus* from the Type-Site of Atsutean Sci. Rep Tohoku Imp. Univ. ser. 2 13(3) pp. 49－50 PL. XVI

Matsumoto Hikoshichiro 1930（昭5）On the Type-Material of *Sus nipponics sendai* Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. ser. 2 13(3) pp. 57－58 PL. XVIII－XXIX

Matsumoto Hikoshichiro 1930（昭5）Report of the Mammalian Remains obtained from the Sites at Aoshima and Hibiku, Province of Rikuzen Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. ser. 2 13(3) pp. 59-93 PL. XXX－XXXVIII

野村　七平，畑井　小虎　1932（昭7）松島湾有殻軟体動物概報，斎藤報恩会博物館時報，報輯号II pp. 2－16

小笠原好彦　1968（昭43）東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器－昭和38年発掘宮城県大木囲貝塚出土土器の内容と糠塚貝塚出土土器の占める位置－仙台湾周辺の考古学的研究，宮城教育大学歴史研究会pp. 21－35

落合　明　1973（昭48）マダイ *Pagrus major*（Temminck et Schlegel）魚類学(下)水産学全集19・3版　恒星社厚生閣pp. 704－709

佐藤　重勝，佐々木　実，菅野　尚　1965，増養殖漁場の水温，東北海域に於ける浅海漁業第二集，東北区水産研究所増殖部pp. 12－13

Shikama Tokio 1949（昭24）The Kuzuii Ossuaries Geological and Palaeontological Studies of the Limestone Fissure Deposites in Kuzuii Totigi precture Sci. Rep. Tohoku Univ. 23

菅原　正明　1972（昭47）縄文時代の集落，考古学研究19(2)考古学研究会 pp. 47－63

田中　完一，竹内　勝郎　1970（昭45）松島湾およびその沿岸の鳥相，特別名勝松島，宮城県教育委員会 pp. 125－134

田中　完一，竹丸　勝郎1970(昭45)松島湾鳥類目録，特別名勝松島，宮城県教育委員会，pp. 151－156

谷田　専治，堀田　秀之，菅波晋一郎　1957（昭32）松島湾の魚類相について，日本水産学会東北支部会報8（1，2）pp. 1－10

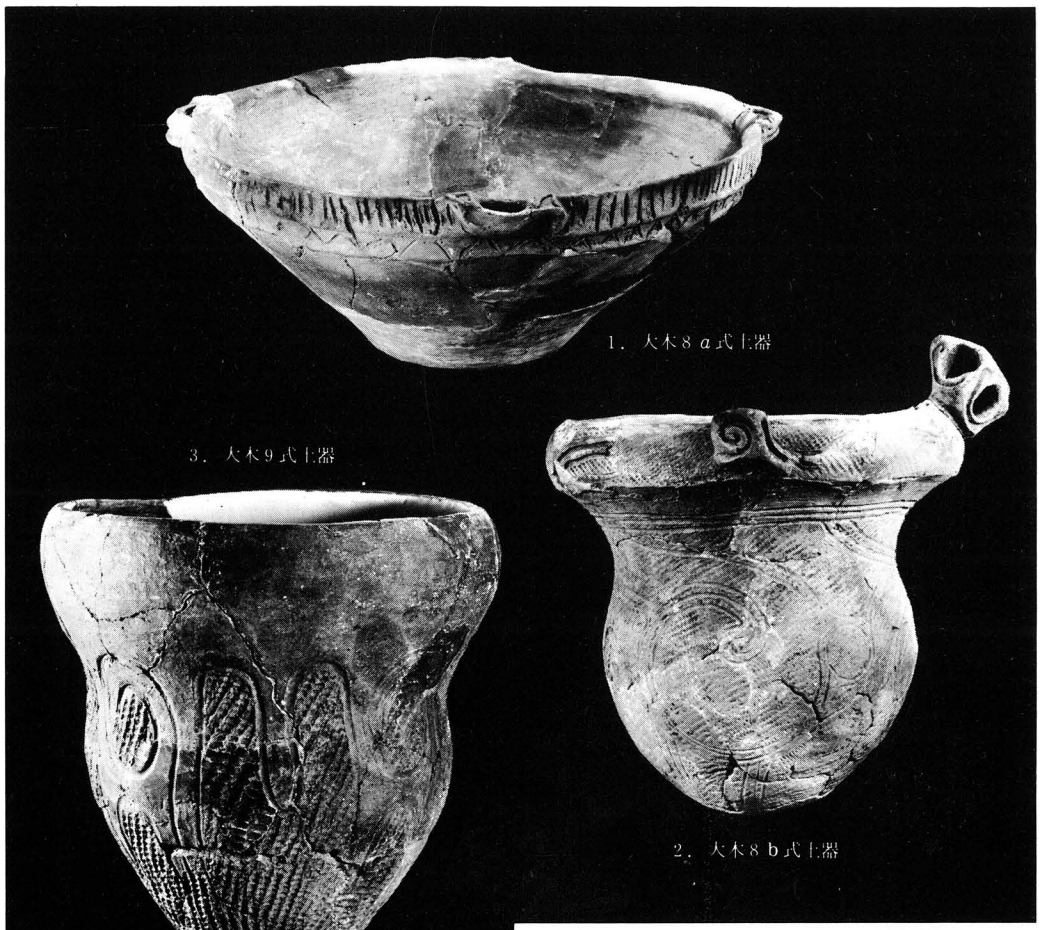
田澤　金吾　1940（昭15）貝塚，人類学先史学講座15，雄山閣 pp. 1－33

山内　清男　1929（昭4）－4月，関東北に於る繊維土器，史前学雑誌1（2）pp. 1－30

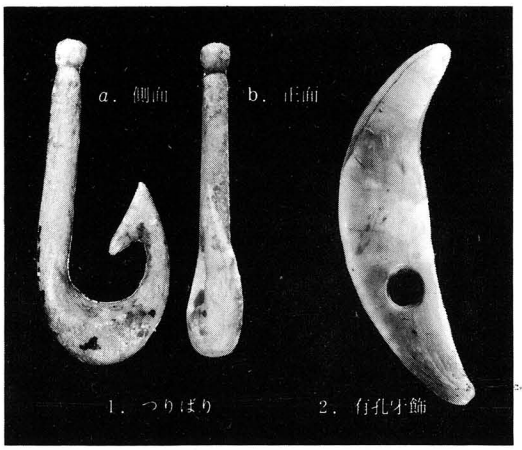
八幡　一郎　1935（昭10）奥羽地方発見の篦状石器，人類学雑誌50(5) pp. 196－200

Young C. C. 1932（昭7）On the Artiodactyla from the Sinanthropus Site at Chouk'outien Geological Survey of China Pal. Sin. ser. c vol. 8 fasc. 2 pp. 5－15

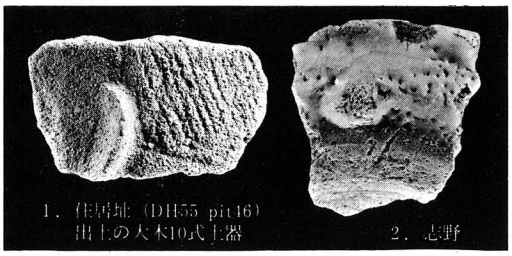
Walter Häntzschel, Farouk EL－Baz, G. C. Amstutz 1968（昭43）Coprolites －Anannotated Bibliography, The Geological Society of America, INC



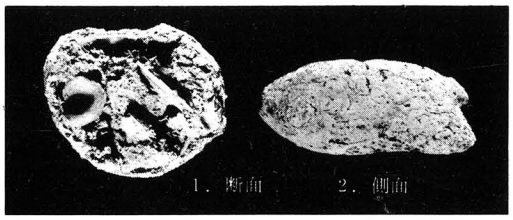
A　土器



C　骨角器

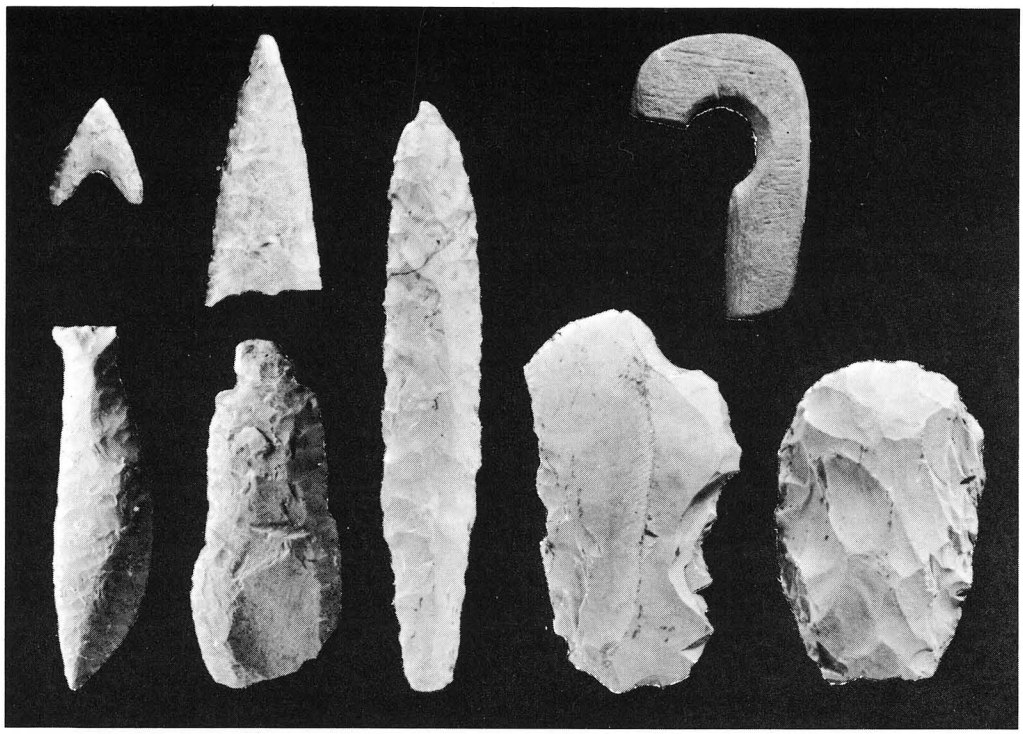


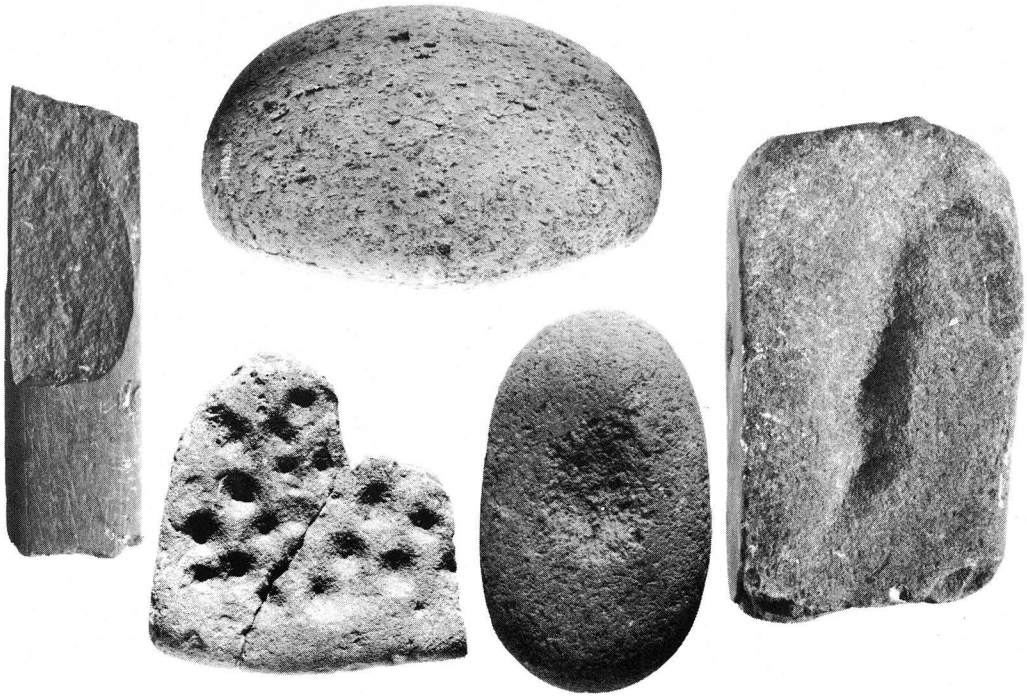
↑B 土器片、陶片　　↓D 糞石（Coprolites）



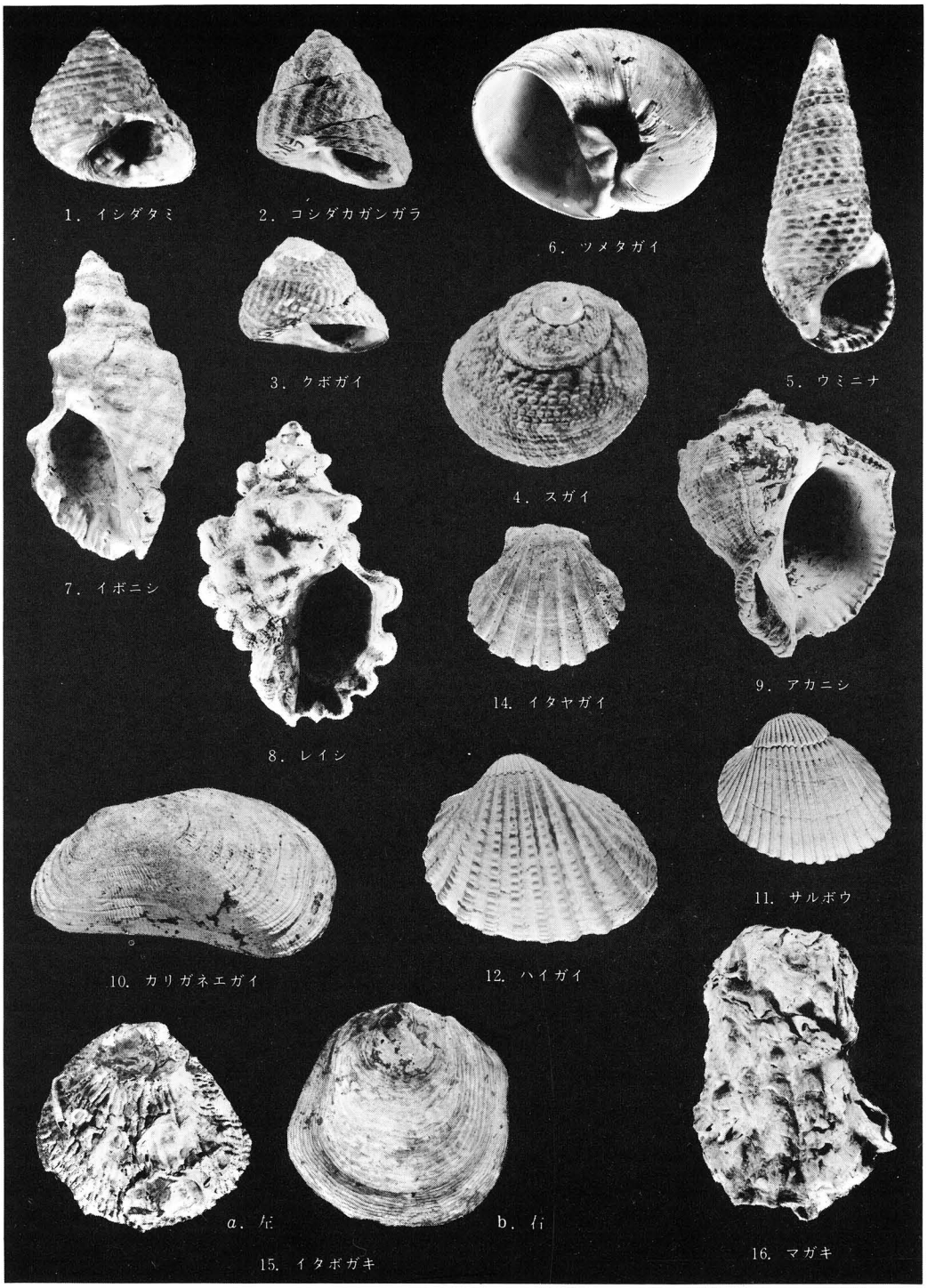
図版Ⅰ　大木囲貝塚出土の遺物

図版II　大木囲貝塚出土の石器・石製品

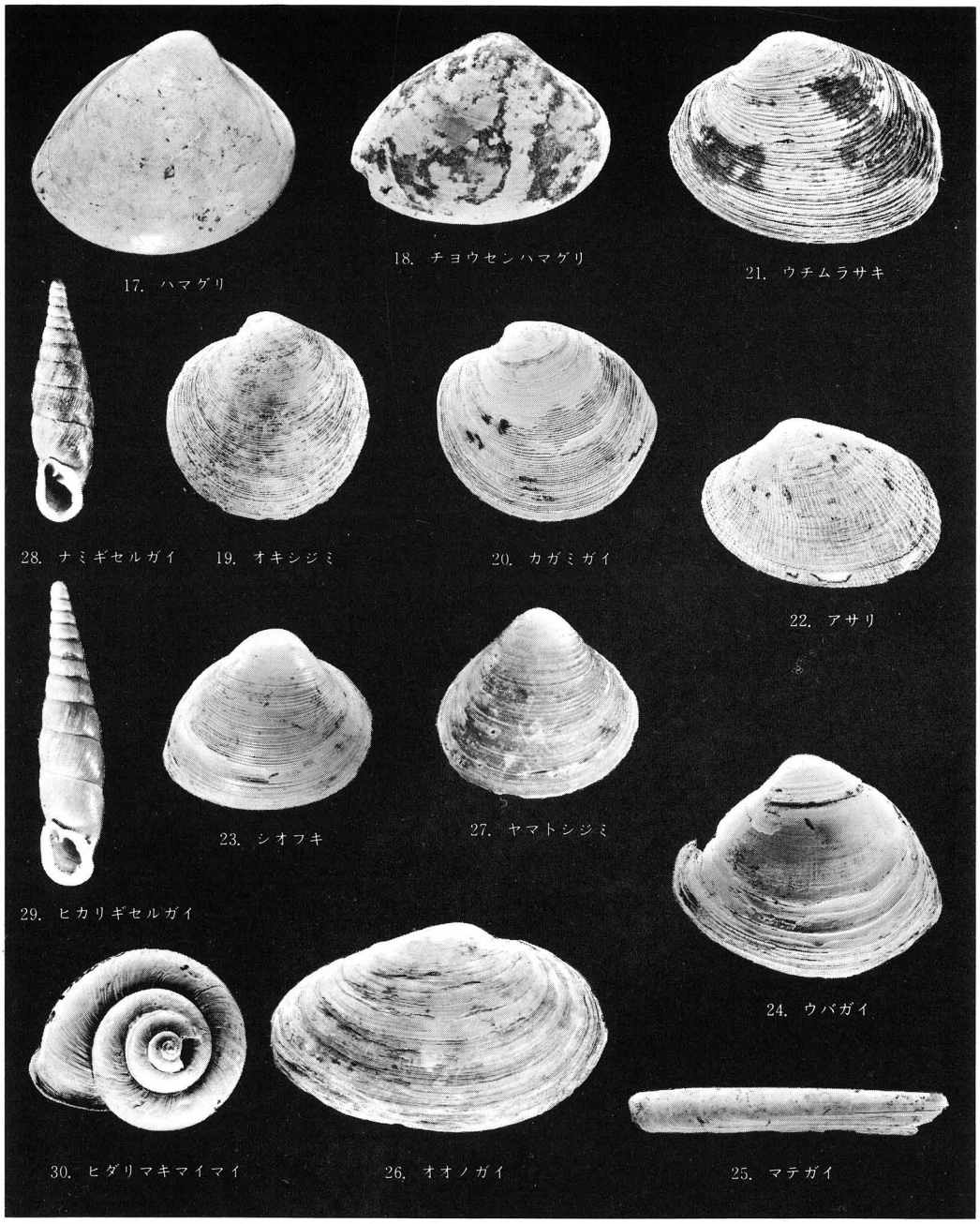




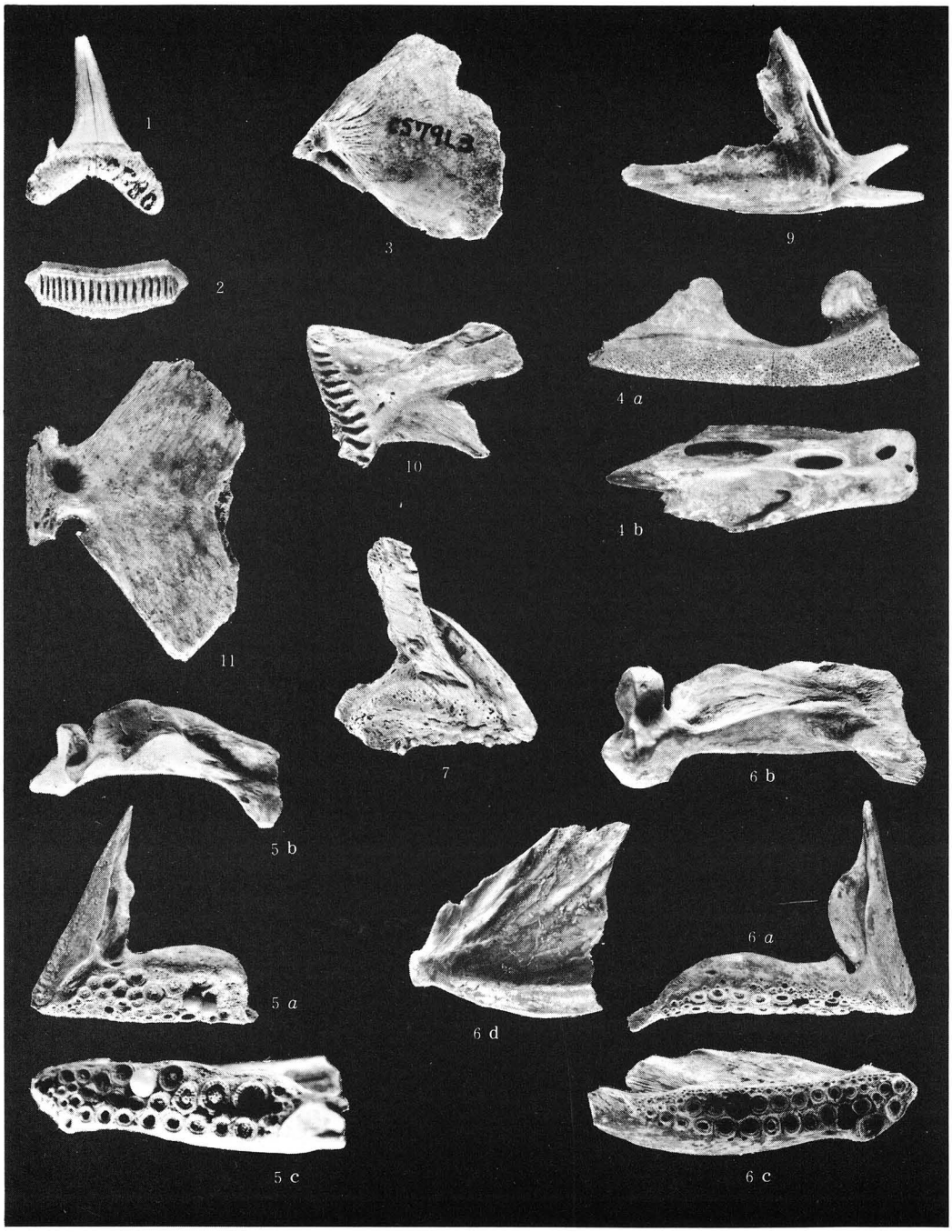
図版III　大木囲貝塚出土の石器・石製品



図版Ⅳ　大木囲貝塚出土の貝

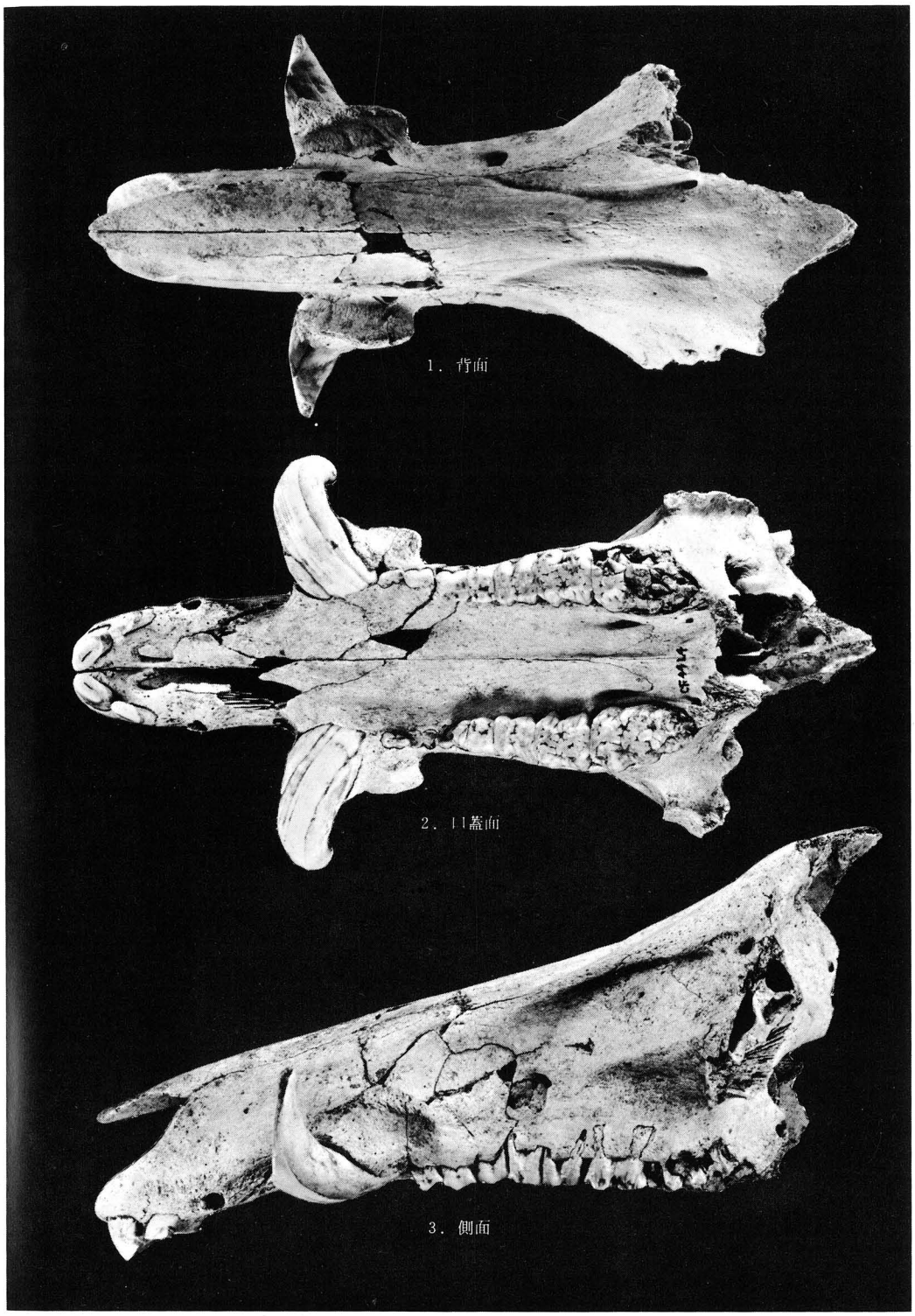


図版Ⅴ　大木囲貝塚出土の貝



1．ミズワニ属の歯　2．トビエイ科歯下面　3．ボラ科主鰓蓋骨　4．スズキ　*a*．前上顎骨　b．歯骨
5．クロダイ　*a*．前上顎骨　b．主上顎骨　c．歯骨　6．マダイ　*a*．前上顎骨　b．主上顎骨
c．歯骨　d．尾舌骨　7．イシダイ前上顎骨　9．マゴチ前鰓蓋骨　10．トラフグ歯骨　11．クロマグロ尾部扇状骨

図版Ⅵ　大木囲貝塚出土の魚骨



図版Ⅶ　大木囲貝塚出土のイノシシ科の頭蓋骨

図11　史跡「大木囲貝塚」全体図（昭和48年度環境整備の成果）

正　誤　表

ページ	行	誤	正
2	3～4	史跡～調べる。	史跡「大木囲貝塚」環境整備事業にかかわる大木囲貝塚の現生植物の調査
16	上から　11	刺犂頭	刺犁頭
	下から　8	(Ohki) Ohwi	(Ohwi) Ohwi
17	上から　18	Chenopdiaceae	Chenopodiaceae
24	〃　2	Zanthoxylum	Xanthoxylum
30	〃　2	(J. F. Gmel.)	(T. F. Gmel.)
31	〃　9	Merrill	Mervill
32	下から　4	britannica	britanica
33	〃　13	bonariensis	bonoriensis
34	〃　8	すぐくついて	すぐくっついて
	〃　11	グン（センダン科植物）	ダン（センダン科植物）
41	写真11の説明文中	ミヅソバ	ミゾソバ
43	図版6Eの見出	アカハツ	アカマツ
45	写真21の説明文中	ヌルヂ	ヌルデ
図版9	3	S　25,000	（抹消）
	10	酉斜面	西斜面
	図一A地区	史蹟大木囲貝塚	史跡大木囲貝塚

史跡「大木囲貝塚」の植物
（第一次調査報告）

学芸員　中條　幸

目　次

はじめに……（1）

1．調査計画……（2）

2．調査結果……（4）

(1) 植生概観……（4）

(2) 植物相……（4）

所産植物目録……（4）

むすび……(35)

3．付　録……(36)

(1) 植生写真……(37)

(2) 植生地図……(47)

は　じ　め　に

史跡「大木囲貝塚」環境整備事業の一環として，当貝塚の現生植物の調査を委嘱された。

筆者は委嘱の趣旨にそうため，本文　1．調査計画の項の如き計画を立て，第1回調査（昭和48年8月20日）より第8回調査（昭和49年2月3日）までに観察し確認した植生の概観と植物相，特に所産植物目録をあげ，貝塚の発掘ならびに環境の保護育成・展示活用などの関連を考え，必要と思われる事項として，各種類の学名・和名・漢名，分布一当地区内（A・B・C・D・E・F・G，後出植生概観および植生地図・写真参照)・国内・国外，植生・花期（月)，利用，その他の事項を併記した。

この調査は，年度半ばから始めた関係で，未だその一斑を垣間みたに過ぎない。従って調査の内容も十分とはいえないが，ひとまず第一次調査報告として整理し発表した。調査を進めるに当って，便宜を与えられた当史跡調査員八巻正文氏および作業員の方々に深く感謝の意を表わしたい。

1. 調　査　計　画

A. 委嘱された事項

史跡「大木囲貝塚」環境整備事業にかかわる試掘調査，植物分類学－大木囲貝塚の現世植物を調べる。

1．目　的

a.　原始時代と現在との相違

b.　気候の変化

c.　人間生活と植物　大木囲貝塚に生えている植物は何に使われたか

d.　環境整備と植物　林や森の保存

2．方　法

a.　種類のリスト

b.　分　布

c.　用　途

d.　標　本…消滅したり，変化したりするので資料の保存

e.　保存すべきものの範囲

B．実　施　事　項

第一次実施事項（昭和48・49・50年度）

1．基本調査（昭和48～49年度）

全地域を一通り観察し概観する。

a.　写真による記録，植物景観・植生・個々の植物など

b.　採集標本の作成　保存用（新聞紙）・展示用（台紙）

c.　観察記録　形態・分類・生態に関すること，萌芽・開花・結実・紅葉・落葉など

d.　カードによる整理(台帖)　学名・和名・漢名，分布，植生・花期，利用，その他　必要事項など

e.　植生地図の作成

2．精密調査（昭和49～50年度）

季節を追って毎月１～２回，全地域を巡回し観察・採集・写真や記録による調査をする。

a.　季節による変化をカラー・モノクロ写真に収める。植物景観，代表的植物の萌芽・開花・結実・紅葉・落葉など

b. 未発見の植物の精査（1.—a.～d.に準ずる）

c. 隣接周辺地区の植物調査（移植活用，つぎの3.～4.の項の資料として）

第二次実施事項（昭和50・51・52年度）

3. 保護育成（昭和50～51年度）

文化財としての保護とともに，積極的な育成をはかる。

a. 自然区（自然そのままに）・半自然区（管理して植生のバランスをとる）・人工区（発掘した地域の保存展示）

b. 隣接周辺地域の植物の移植と育成，森林・草地などを育成

c. できれば現在の地域以上に，借景となる周辺の自然を緊急に保護と確保

4. 展示活用（昭和51～52年度）

史跡公園として整備し，資料館なども設置して，学校・社会教育の分野で活用する。

a. 観察路をつくる。貝塚や自然を観察しやすいように整理し，名札や説明板・資料などの用意

b. 資料館の設置　関係資料の収集保存，さらに展示

c. 教育活動　考古・自然の学習教室，観察・見学会，各種の講座などの実施

d. 専門学術（特に考古学を中心とした）研究センターとしての活動

2. 調　査　結　果

(1) 植生概観

当地域の植生状況については，なお精細な観察調査を必要とするが，現在までの調査ではつぎの如く7地区に区分するのが適当であると考える。

A：台地上旧耕作地区（主として貝塚分布地区）

B：スギ・クロマツ・落葉広葉樹林地区

C：低地・湿地・沼沢地区

D：竹林・落葉広葉樹林，同伐採地区

E：アカマツ・ナラ林，同伐採地区

F：西斜面旧耕作地区

G：西側断崖地区

（註：3．付　録（1）植生写真1～23および（2）植生地図　参照）

なお，各地区の植生状況については，次年度の観察調査を加え，資料の整理をまって詳細な報告を行ないたい。

(2) 植　物　相

植物相の詳細については，観察調査の途中でもあるので，次年度の調査を実施した上で発表することとし，第1回調査(昭和48年8月20日)より第6回調査(昭和48年11月4日)までに確認したもので，種・変種・品種を含めて，73科245種類の所産植物目録を示した。

なお，各種類の記述は，学名・和名・漢名，分布一地域内（A・B・C・D・E・F・G，前出参照）・国内・国外，植生・花期(月)，利用，その他必要事項とした。なお，学名および和名，分布，植生・花期などは，大井次三郎著：日本植物誌　シダ篇・顕花篇　改訂新版（昭和47年6月至文堂）に準拠した。また，学名・和名の一部や漢名，利用やその他については，牧野富太郎著：牧野新日本植物図鑑（昭和45年4月北隆館）を参考とした。

所　産　植　物　目　録

PTERIDOPHYTA　羊歯植物

Equisetaceae　トクサ科

1. Equisetum arvense Linn.　スギナ　問荆

A・C，北海道・本州・四国・九州，北半球暖帯以北寒帯，平地や山地の日当りよい草地・裸地に普通，—III—VI—，ツクシ(土筆)は食用，スギナ(杉菜)は若葉を食用。

Osmundaceae　ゼンマイ科

2. Osmunda japonica Thunb.　ゼンマイ

B，北海道・本州・四国・九州・琉球，南樺太・朝鮮・台湾・中国・ヒマラヤ，山地や原野・水辺に普通，—Ⅳ—Ⅴ(—Ⅹ)—，若い葉をゆで乾燥して貯え食用，銭巻の意味で胞子葉が巻いて円るいのを銭にたとえた。

Pteridaceae　ワラビ科

3. Pteridium aquilinum (Linn.) Kuhn var. latiusculum (Desv.) Underw.　ワラビ　蕨

A・B・D・E・F，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・樺太・南千島・カムチャッカ・シベリア・欧州・北米東部，種としては世界の熱帯および温帯に広く分布，—Ⅷ—Ⅹ—，日当りのよい山地斜面に普通，若い葉を食用，根茎を打ちくだいて澱粉をとる。これを蕨粉といい，食用や糊の原料とする。残りの茎を蕨縄とする。ワラビのワラはから(茎)に通じ，ビは食用になる実質のあるミ(実)の転化とする説がある。

Aspidiaceae　オシダ科

4. Onoclea sensibilis Linn.　コウヤワラビ

B・C・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・南千島・南樺太・東シベリア・北米，—Ⅸ—Ⅹ—，原野・水辺など湿った所にやや普通，高野蕨　高野山(和歌山県)に産すると思われた。

5. Polystichum retroso-paleaceum (Kodama) Tagawa　サカゲイノデ

B，北海道・本州・四国・九州，山中の林地，猪の手，鱗片を密にかぶったこぶし状に巻いた若い葉をイノシシの手にたとえた。

6. Rumohra Miqueliana (Maxim.) Ching　ナライシダ

B・G，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，山中の林内，奈良井羊歯　明治13年(1880)長野県西筑摩郡奈良井で採集したによる。

7. Dryopteris lacera (Thunb.) O. Kuntze　クマワラビ

B・D，本州・四国・九州，朝鮮・満州，山地の林内，熊蕨は葉柄茎部の黒っぽい鱗片が密生するのを，熊が多毛であるのになぞらえた。実葉の羽片は葉身の上部にあって，冬期に枯れて落ちる。

8. D. monticola (Makino) C. Chr.　ミヤマベニシダ

G，北海道・本州・四国，朝鮮・南満州，ブナ帯以上の林下に生える。深山紅羊歯はベニシダに似て深山に生えるの意。

9. Lastrea totta (Schltdl.) Ohwi　ミゾシダ

G，本州・四国・九州・琉球，朝鮮・台湾・中国・マレーシア・印度・アフリカ，山野の湿った所に普通，溝羊歯は溝附近の湿った所に多くみられる。

10. L. oligophlebia (Baker) Copel.　ヒメワラビ

B，本州(宮城県以南)・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・台湾・ミクロネシア・濠州，低地・丘陵地の薮林に普通，姫蕨は葉がワラビに似ているが細裂・うすくて弱い感じによる。

11. Athyrium grammitoides (Presl) Milde　ホソバシケシダ

G，北海道・本州・四国・九州，低地・低山地の日蔭に普通，変化が多い，細葉湿気羊歯の意。

12. A. Yokoscense (Franch. et savat.) H. Chr.　ヘビノネコザ，カナクサ

D，北海道・本州・四国・九州，樺太・朝鮮・満州・東シベリア，低地や山地に普通，変化が多い，蛇の寝御座の意味，カナクサは金草の意で，鉱山の坑道や鉱石の捨場によく茂るによる。

13. A. niponicum (Mett.) Hance　イヌワラビ

G，北海道(南西部)・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国・台湾，低地・丘陵地に普通，犬蕨は普通にあって利用価値のないワラビの意。

14. A. vidalii (Franch. et Savat.) Nakai　ヤマイヌワラビ

B・G，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・台湾，山中林下に普通，変化が多い，山犬蕨は山地生のイヌワラビの意。

Aspleniaceae　チャセンシダ科

15. Asplenium incisum Thunb.　トラノオシダ

B・G，北海道・本州・四国・九州・琉球，樺太・南千島・カムチャッカ・朝鮮・満州・中国，低地・丘陵地に普通，中軸の下半部下面が栗褐色，虎の尾羊歯は細長い葉の形を虎の尾にみたてたが，実状にそわない。

SPERMATOPHYTA　種子植物

Pinaceae　マ　ツ　科

16. Pinus densiflora Sieb. et Zucc.　アカマツ，メマツ

B・E，北海道(南部)・本州・四国・九州，朝鮮，山野に最も普通，品種も多く，クロマツとの雑種もある，—V—VI—，材は建築・器具・土木用，松脂はテレビン油の原料。

17. P. thunbergii Parlat.　クロマツ，オマツ

A，本州・四国・九州，南朝鮮(島)，海岸地方に自生，変種が多い，—V—VI—，材は建築・土木用，幹から松脂，葉から香油。

Taxodiaceae　スギ科

18. Cryptomeria japonica (Linn. fil.) D. Don　スギ　倭木

B・D・G，本州・四国・九州(日本特産)自生，普通は植林，—III—IV—，材の用途は広く，主要樹木の一つで園芸品種も多い。

Cupressaceae　ヒノキ科

19. Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc.　ヒノキ

B・G，本州(磐城・関東以西)・四国・九州に自生，各地に栽植，品種はなはだ多い，—IV—火の木の意味で，大昔の人がこの木をこすり合せて火を出したことによる。材は用途広く建築材など。

ANGIOSPERMAE　被子植物

MONOCOTYLEDONEAE　単子葉植物

Typhaceae　ガマ科

20. Typha latifolia Linn.　ガマ　香蒲

C，北海道・本州・四国・九州(南部)，北半球温帯全般，沼沢地や水中に群生，—VI—VIII—，花粉は蒲黄と称し薬用，葉はむしろや敷物。

21. T. orientalis Presl　コガマ

C，本州・四国・九州，中国・フィリピン・ウスリー，池・沼の水中に群生，—VII—VIII—。

Gramineae　イネ科

22. Phyllostachys bambusoides Sieb. et Zucc.　マダケ　苦竹

D，東北以北の寒地を除き広く栽植，中国原産，—VI—，稈は竹細工用，筍は食用。

23. Arundinaria chino (Franch. et Savat.) Makino　アズマネザサ，シナガワダケ

B・D・E，本州(関東北部より東北南部)，—VI—。

24. Calamagrostis arundinacea (Linn.) Roth var. brachytricha (Steud.) Hack.

ノガリヤス，サイドウガヤ

E，北海道(西南部)・本州・四国・九州，欧亜大陸，丘陵地・山地に最も普通，　—Ⅷ—Ⅹ—。

25. C. epigeios (Linn.) Roth　ヤマアワ

D，北海道・本州・四国・九州，アジア・欧州・北米の温帯，平地・山地の草原や林間，近海の砂地，—Ⅶ—Ⅸ—，山粟は山地にはえ花穂が粟に似ているの意。

26. Avena fatua Linn.　カラスムギ

A，日本その他温帯地方，欧州・西アジア・北アフリカ原産，平地や廃地，—Ⅳ—Ⅶ—。

27. Achnatherum pekinense (Hance) Ohwi　ハネガヤ

C，北海道・本州，東シベリア・中国北部・朝鮮・樺太・南千島，山地草地や林地，—Ⅷ—Ⅸ—，羽茅　Stipa pennata Linn. の羽状毛に名付けられたもの。

28. Leersia oryzoides (Linn.) Sw.　エゾノサヤヌカグサ

C，北海道・本州・四国・九州，北半球温帯地方に広く普通，水湿地，—Ⅷ—Ⅹ—。

29. Zizania latifolia Turcz.　マコモ　菰

C，北海道・本州・四国・九州・琉球，東シベリア・中国・インドシナ・台湾，沼・池や溝中に群生，—Ⅷ—Ⅹ—，コモヅノというのは一種の菌に犯された茎の芽で，琉球・台湾および中国で食用。

30. Phragmites communis Trin.　ヨシ，キタヨシ，アシ　蘆

C，北海道・本州・四国・九州，世界の温帯・暖帯・亜寒帯一般に広く分布，沼・河など水湿地に群生，—Ⅷ—Ⅹ—，アシは稈(はし)の変化したもの，ヨシはアシが(悪)に通ずるのでこれを嫌って名付けた。

31. Eragrostis ferruginea (Thunb.) Beauv.　カゼクサ，ミチシバ

A・C，本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国・ヒマラヤ，平地の路傍や堤防に群生，—Ⅷ—Ⅹ—。

32. Pennisetum alopecuroides (Linn.) Spreng.　チカラシバ，ミチシバ

A・C，北海道(西南部)・本州・四国・九州・琉球，中国・朝鮮・台湾・フィリピン，平地，・草原路傍に最も普通，—Ⅷ—Ⅸ—，子どもが茎を使って強さ比べをして遊ぶ。

33. Setaria viridis (Linn.) Beauv.　エノコログサ　狗尾草・莠

A・E，北海道・本州・四国・九州，世界の温帯に広く分布，平地の草原や路傍に最も普通—Ⅷ—Ⅸ—。

34. S. viridis (Linn.) Beauv. forma purpurascens Maxim.　ムラサキエノコログサ

F，花序が紫色。

35. S. faberi Herrm.　アキノエノコログサ

F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国・台湾，北米に帰化，草原や路傍，—Ⅷ—Ⅸ—。

36. S. glauca (Linn.) Beauv.　キンエノコロ

F，北海道・本州・四国・九州，北半球温帯一般，草原や路傍・廃地に普通，—Ⅷ—Ⅹ—，花穂が黄金色。

37. Oplismenus undulatifolius (Ard.) Roemer et Schultes　ケチヂミザサ

B・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国から旧世界の温帯・暖帯・亜熱帯，丘陵地林内蔭地に群生，—Ⅷ—Ⅹ—，縮み笹の意。

38. Echinochloa crus-galli (Linn.) Beauv. var crus-galli　イヌビエ　野稗

C，本州・四国・九州，世界の暖地・熱帯に広く分布，原野の廃地・路傍・溝辺に叢生，—Ⅷ—Ⅹ—，犬稗は食用にならないヒエの意。

ケイヌビエ(Panicum Crus-galli Linn. var echinata Makino)　C，穂毛は黒紫色剛毛，イヌビエに含める。

39. Isachne globosa (Thunb.) O. Kuntze　チゴザサ

A・C，北海道・本州・四国・九州，中国・東南アジア・オーストラリア，湿地・溝畔に群生，—Ⅵ—Ⅷ—，稚児笹の意。

40. Miscanthus sinensis Anderss　ススキ，カヤ　芒

A・B・D・E・G，北海道・本州・四国・九州・琉球，南千島・朝鮮・中国・台湾，内陸の山野に大群落，変化が多い，—Ⅷ—Ⅹ—，花穂をオバナ(尾花)といい秋の七草の一つ，カヤは刈屋根の意で屋根をふく。

41. Spodiopogon sibiricus Trin.　オオアブラススキ

E・G，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国・シベリア，山野草原に普通，—Ⅷ—Ⅹ—，大油ススキの意。

42. Microstegium vimineum (Trin.) A. Camus var. polystachyum (Franch. et Savat.) Ohwi　アシボソ

E，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・台湾・マレーシア・インド・コウカサス，原野・林地内，—Ⅸ—Ⅹ—，脚細の意で脚部の茎が上部より繊細なるによる。

43. Arthraxon hispidus (Thunb.) Makino　コブナグサ

B・C，北海道・本州・四国・九州，アジアおよびアフリカ東北部(？)　熱帯一般，いたる所の田畦・原地・林中に群生，—Ⅸ—Ⅺ—，八丈絹(八丈島)の黄色染料，小鮒草の意で葉の形による。

44. Themeda japonica (Willd.) C. Tanaka　メガルガヤ，カルカヤ

E，本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国・インド，丘陵地，—Ⅸ—Ⅹ—，刈カヤは屋根ふきのため刈る草の意。

Cyperaceae　カヤツリグサ科

45. Cyperus orthostachyus Franch. et Savat.　ウシクグ

C，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国・満州・ウスリー・アムール・ダフリア，湿地に普通，—Ⅷ—Ⅹ—，牛クグはクグがカヤツリグサ類の古名。

46. C. microiria Steud.　カヤツリグサ，キガヤツリ

A，本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国，草地・畑地や荒地に最も普通，—Ⅷ—Ⅹ—，蚊帳釣草は茎を子どもの遊びに使う。

47. Scirpus wichurae Böcklr　アブラガヤ，アイバソウ

C，北海道・本州・四国・九州，湿地に普通，変化が多い，—Ⅷ—Ⅹ—，油ガヤは花穂が油色で油くさい。

48. S. triqueter Linn.　サンカクイ

C，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・ウスリー・満州・中国・マレーシア・インドから欧州南部，池・河畔の泥湿地に普通，—Ⅶ—Ⅹ—，台湾では蓆草，別名タイコウイといって，大甲蓆(むしろ)をつくる。三角イは茎の形による。

49. S. tabernaemontani Gmel.　フトイ

C，北海道・本州・四国・九州，樺太・千島・朝鮮から欧州，池沼の水辺に群生，庭池に栽培し観賞，—Ⅶ—Ⅹ—，太イの意。

Commelinaceae　ツユクサ科

50. Commelina communis Linn.　ツユクサ　鴨跖草

A・B・C・D・E・G，北海道・本州・四国・九州，樺太・ウスリー・朝鮮・満州・中国，平地・丘陵地の畑地や草原に最も普通，—Ⅵ—Ⅸ—，露草の意。着草(ツキクサ)は古名で，花で布を刷り染めしたことによる。

51. Aneilema keisak Hassk.　イボクサ

B，本州・四国・九州・琉球，中国，水田や沼地の水湿地，池畔に普通，—Ⅸ—Ⅹ—，この草をいぼにつけると取れるによる。別名はイボトリグサ。

Pontederiaceae　ミズアオイ科

52. Monochoria vaginalis (Burm. fil.) Presl. var. plantaginea (Roxb.) Solms-Laub.
コナギ，ササナギ，ミズナギ　鴨舌草

C，本州・四国・九州・琉球，台湾・中国・インド・マレーシア・朝鮮・満州，池や水田に普通，—Ⅸ—Ⅹ—，小形のナギ(ミズアオイ)の意。

Liliaceae　ユ　リ　科

53. Hemerocallis fulva (Linn.) Linn. var. Kwanso Regel　ヤブカンゾウ，オニカンゾウ
萱草

A・D，北海道・本州・四国・九州，平地や丘陵地に普通，—Ⅶ—Ⅷ—，萱草の本体は基本種の H. fulva Linn.　ホンカンゾウ。

54. Allium grayi Regel　ノビル　山蒜

F，北海道・本州・四国・九州・琉球，山野や堤に普通，—Ⅴ—Ⅵ—，野にあるヒル，ヒルはネギやニンニクの総称。

55. A. sativum Linn. forma pekinense Makino　ニンニク　葫

A(畑あと)，支那の原産，畑に栽培，—Ⅵ—Ⅶ—，鱗茎を食用，とくに強壮薬として賞用，忍辱(ニンニク)耐え忍ぶの意味，古名オオビルは大形のネギの意。

56. Lilium auratum Lindl.　ヤマユリ

B，本州(中部以北)・北海道(帰化)，丘陵地や山地に自生，人家に栽培，—Ⅶ—Ⅷ—，鱗茎を食用，山百合の意。

57. Polygonatum odoratum (Mill.) Druce var. pluriflorum (Miq.) Ohwi　アマドコロ
萎蕤(イズイ)

A・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，山地や原野，—Ⅳ—Ⅵ—，甘ドコロは地下茎が少し甘味を持つの意。

58. Rohdea japonica (Thunb.) Roth　オモト　万年青

B・D (多数群生)，本州(東海道以西)・四国・九州，中国，暖地の林中に群生，観賞用として培養，品種が多い。—Ⅴ—Ⅵ—，大本(オオモト)の意。

59. Liriope minor (Maxim.) Makino　ヒメヤブラン

D，北海道・本州・四国・九州・琉球，中国，平地や林中に群生，—Ⅵ—Ⅸ—，姫ヤブランの意。

60. Ophiopogon japonicus (Linn. fil.) Ker-Gawl.　ジャノヒゲ　書帯草

B，北海道・本州・四国・九州，山地の樹蔭，—Ⅶ—Ⅷ—，机上の上品な飾り物，蛇のヒゲまたは龍のヒゲの意。

61. Smilax riparia A. DC. var. ussuriensis (Regel) Hara et T. Koyama　シオデ　牛尾菜

B，北海道・本州・四国・九州，満州・中国・ウスリー，原野・山林の縁に生える，—Ⅶ—Ⅷ—，若い茎や葉を食用，シオデは北海道アイヌの方言シユウホンテによる。

62. S. china Linn.　サルトリイバラ

B・E，北海道・本州・四国・九州，中国・朝鮮・インドシナ・フィリピン，山地・丘陵地の叢林や原野，—Ⅳ—，根はパイプ，根・茎は民間薬(和すなわち日本産の山奇粮サンキライ)，葉は餅を包む，猿捕りのイバラの意。

Amaryllidaceae　ヒガンバナ科

63. Lycoris squamigera Maxim.　ナツズイセン

A・D，本州・四国・九州，自生(中部以北山地)，庭園に栽植し花を観賞，—Ⅶ—Ⅸ—，夏水仙は葉がスイセンに似て，夏花が咲くによる。

Dioscoreaceae　ヤマイモ科

64. Dioscorea batatas Decne.　ナガイモ　薯蕷(ショヨ)，山薬→野山薬（山に生えるもの)・家山薬(田畑に栽培するもの)

A・D，北海道・本州・四国・九州，中国・朝鮮・台湾，山野に生え，田畑に栽植，—Ⅷ—Ⅸ—，長芋は肉質根が長いの意。

Zingiberaceae　ショウガ科

65. Zingiber mioga (Thunb.) Roscoe　ミョウガ　蘘荷

B，本州・四国・九州，熱帯アジア原産，樹蔭地，栽植，—Ⅷ—Ⅹ—，花序と若芽を食用，古名メガ，メウガがのびてミョウガとなった。

DICOTYLEDONEAE　双子葉植物

CHORIPETALAE　離弁花類

Salicaceae　ヤナギ科

66. Salix hondoensis Koidz.　ミチノクシロヤナギ

C，北海道・本州，—Ⅵ—Ⅴ—。

67. S. bakko Kimura　バッコヤナギ，ヤマネコヤナギ

D・F，北海道(西部)・本州(近畿以東)，山中陽地，—Ⅳ—Ⅴ—，木質表面に短い隆起線がある。

68. S. vulpina Anders.　キツネヤナギ，イワヤナギ

D，北海道・本州・四国・九州，南千島，山地，—Ⅳ—Ⅴ—，狐柳の意。

69. S. integra Thunb.　イヌコリヤナギ

F，本州・九州，朝鮮，—Ⅲ—Ⅵ—，犬行李柳はコリヤナギに似ているが利用価値がないの意。

Juglandaceae　クルミ科

70. Juglans ailanthifolia Carr.　オニグルミ

B・F，北海道・本州・四国・九州，山野の流れに沿って生える，各地に栽植，—Ⅴ—，小銃の台木，種子は食用，鬼グルミは核果の凹凸があって醜いの意。

Betulaceae　カバノキ科

71. Carpinus tschonoskii Maxim.　イヌシデ，シロシデ

F，本州・四国・九州，朝鮮・中国，山地や平地に生える，—Ⅴ—，犬シデはひも状の花穂，白シデは芽や新葉に白い毛が多いことによる。

72. Alnus japonica (Thunb.) Steud.　ハンノキ

C，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・ウスリー・満州，水湿ある低地に普通，—Ⅲ—，果実は染料，ハリノキの転化，ハリノキの語源は不明。

Fagaceae　ブナ科

73. Quercus serrata Thunb.　コナラ，ハハソ，ナラ　青岡樹

B・D・E，北海道・本州・四国・九州，丘陵地や山地に普通，変化が多い，—Ⅳ—，材は建築・土木・器具・薪炭用，秋おそく黄葉または紅葉，楢は俗用字。

74. Q. aliena Blume　ナラガシワ

E，本州(北陸地方・近畿以西)・四国・九州，丘陵地・山地に生える，—Ⅳ—，コナラとカシワの間種の特徴を示す。

75. Q. dentata Thunb.　カシワ，モチガシワ

E，北海道・本州・四国・九州，南千島・朝鮮・中国，山地に生える，—Ⅴ—，樹皮は染料，葉は餅を包む，炊葉は食物を盛る葉の意。

76. Castanea crenata Sieb. et Zucc.　クリ

B・D・E，北海道(西南部)・本州・四国・九州，中国・朝鮮，山地に自生，果樹として栽植，—Ⅶ—，種子を食用，クリは黒実の意。漢名の栗は支那産 C. bungeana Blume アマグリを指す。

Ulmaceae　ニ　レ　科

77. Zelkova serrata (Thunb.) Makino　ケヤキ

B・D・F，本州・四国・九州，中国，平地や丘陵地，栽植，—Ⅳ—Ⅴ—，建築・器具材料とし賞用，ケヤキは顕著な樹の意，槻(俗字ツキ)ケヤキの古名 var. Tsuki Makino 材質はよくない。欅はクルミ科のPterocarya stenoptera DC. の漢名，従って誤用。

78. Celtis sinensis Pers. var. japonica (Planch.) Nakai　エノキ　朴樹(慣用)

A・B・D・E・G，本州・四国・九州，朝鮮・中国(母種は中国南部)，平地・丘陵地にもっとも普通，—Ⅳ—Ⅴ—，果実は子どもが食べる。大木囲貝塚の大木は榎(えのき)との一説ががあるが，これは和字で夏に樹陰が好まれるので，木に夏を配したもの，漢字の榎は本種ではなく別の物である。しかし当史跡のシンボルの木とするに価値がある。シダレエノキ forma pendula Makino 枝が垂れる，エゾエノキ C. jessoensis Koidz. (北海道・本州・四国・九州朝鮮)，コバノチョウセンエノキ C. leveillei Nakai (九州，朝鮮)，チュウゴクエノキ C. leveille Nakai var. holophylla Nakai (九州，中国)がある。

Moraceae　ク　ワ　科

79. Fatoua villosa (Thunb.) Nakai　クワクサ　水蛇麻

B・D，本州・四国・九州・琉球，中国，低地の草地，畑地・荒地に普通，—Ⅸ—Ⅹ—，桑草の意。

80. Morus alba Linn.　トウグワ　桑

A・B，中国・朝鮮の原産，広く栽植，品種極めて多い，—Ⅳ—Ⅴ—，果穂を食用，葉は養蚕の飼料。

81. M. bombycis Koidz.　ヤマグワ，クワ

A・D・F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・樺太・南千島，山地に自生，—Ⅳ—Ⅴ—，クワの語源 一説は食葉(クワ)，他は蚕葉(コハ)の転化，蚕の食う葉の意。

82. Broussonetia papyrifera (Linn.) Vent.　カジノキ　楮・構・穀

B・D，本州(中部地方南部以西)・四国・九州・琉球，中国・台湾など南方暖地，自生または栽植，南方暖地より渡来，—Ⅴ—Ⅵ—，枝の皮を和紙の原料，コウゾの古名カゾの転化か。

83. B. kazinoki Sieb.　コウゾ

D，本州・四国・九州・琉球，朝鮮・台湾・中国，山地に自生，栽植，—Ⅳ—Ⅴ—，和紙の原料，紙麻(カミソ)の音便カウゾから，カウゾはカゾからみちびかれた。楮は構すなわちカジノキの通名。

84. Humlus japonicus Sieb. et Zucc.　カナムグラ　葎草

A・B・D・G，北海道・本州・四国・九州・琉球，中国・台湾，原野・山林・路傍や荒地に最も普通，—Ⅳ—Ⅹ—，雌雄異株，カナは鉄の意，茎が強いから，ムグラはほうぼうと茂る雑草の意。

85. H. lupulus Linn. var. cordifolius (Miq.) Maxim.　カラハナソウ

B・C・D，北海道・本州(関東地方・中部以北)，中国，山地に群生，—Ⅷ—Ⅸ—，雌雄異株，唐花草は唐花は模様に使われる花形，つるの上についた果穂をたとえた。母種のセイヨウカラハナソウ H. lupulus Linn. は欧州原産，ホップといってビールの苦味をつける。

Urticaceae　イラクサ科

86. Pilea hamaoi Makino　ミズ

A・G，北海道・本州・四国・九州，中国，籔沿い・溪流のふちなど山地や原野の陰湿地，—Ⅶ—Ⅹ—，茎葉を食用(山菜)，茎が半透明で軟くみずみずしているのでミズという。

87. Boehmeria tricuspis (Hance) Makino　アカソ

A・B・D，北海道・本州・四国・九州，山地や原野の樹陰・畑あぜなどに群生，—Ⅶ—Ⅸ—，赤麻の意。

88. B. holosericea Blume　オニヤブマオ

B・D・F，本州・四国・九州，中国・インドシナ，海岸近くの原野や低山の溪流，—Ⅷ—Ⅸ—，鬼籔苧麻はヤブマオより粗強の意。

Polygonaceae　タ　デ　科

89. Rumex acetosella Linn.　ヒメスイバ

A，北海道・本州・四国・九州，欧州およびアジア原産，日当りよい草地や荒地に最も普通，—Ⅴ—Ⅶ—，帰化植物(明治初年渡来)，雌雄異株，姫酸葉の意。

90. R. acetosa Linn.　スイバ　酸模・蓚

A，北海道・本州・四国・九州，北半球温帯一般，低地または山地・草原・堤や畔など，—Ⅴ—Ⅵ—，雌雄異株，酸い葉の意。

91. R. japonicus Houtt.　ギシギシ　羊蹄

A・C・G，北海道・本州・四国・九州，樺太・朝鮮・カムチャッカ，原野や路傍の湿地・水辺，—Ⅵ—Ⅷ—，根を薬用(シノネ，シはギシギシの古名))，ギシギシは京都の方言，意味不明。

92. Polygonum filiforme Thunb.　ミズヒキ　毛蓼

B・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国・インドシナ，林地や藪地，—Ⅷ—Ⅹ—，水引は花穂をたとえた。

93. P. aviculare Linn.　ミチヤナギ，ニワヤナギ　萹蓄

A・F，北海道・本州・四国・九州，北半球湿帯一般,草地路傍にきわめて普通,—Ⅴ—Ⅹ—，変化が非常に多く，種々な系統がある。道柳・庭柳は葉形が柳のようで道や庭に生えるの意。

94. P. perfoliatum Linn.　イシミカワ，サデクサ　刺犂頭

A，北海道・本州・九州，朝鮮・中国・マレー・インド，山地や原野に普通，—Ⅶ—Ⅹ—。

95. P. senticosum (Meisener) Franch. et Savat.　ママコノシリヌグイ

A・B・D，北海道・本州・四国・九州，中国・朝鮮，山地や原野に普通，—Ⅵ—Ⅸ—，継子の尻拭，逆向きの刺のある茎で継子の尻を拭うの意。

96. P. thunbergii Sieb. et Zucc.　ミゾソバ，ウシノヒタイ

B・C，北海道・本州・四国・九州，中国・台湾・朝鮮・ウスリー，低地や山地の水湿のある所に群生，非常に変化がある。—Ⅷ—Ⅹ—，溝に繁茂するソバの意，葉形がソバの葉に，また牛の額（ヒタイ）に似ているによる。

97. P. thunbergii Sieb. et Zucc. var. stoloniferum. Makino　オオミゾソバ

C，山地や原野の水辺，全体に大形。

98. P. sieboldii Maxim.　アキノウナギツカミ

B・C・F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国・東シベリア，山地や原野の湿地帯や樹陰，—Ⅵ—Ⅸ—，茎に刺があるのでウナギがつかめるの意で，秋花が咲く。

ウナギツカミ var. aestivum (Ohki) Ohwi　6～7月ごろ開花，中間型が多い。

99. P. japonicum Meisn.　シロバナサクラタデ

A，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮南部・中国，水湿のある草地，—Ⅷ—Ⅹ—，サクラタデに比べ花は白色小形。

100. P. conspicum (Nakai) Nakai　サクラタデ

A・B・D，本州・四国・九州，朝鮮，水湿のある向陽地，—Ⅷ—Ⅹ—，雌雄異株。

101. P. caespitosum Blume var. laxiflorum Meisn.　ハナタデ

B・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，山地・草地の水湿ある陰地，—Ⅷ—Ⅸ—，

生育状況によって花の色に濃淡あり，疎密も一様でない。牧野富太郎博士はヤブタデ P. yokusaianum Makino とした。

102. P. longisetum De Bruyn イヌタデ，アカノマンマ

C・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・台湾・中国・マレーシア，畑地・田畔・草地や路傍に最も普通，—Ⅶ—Ⅸ—，犬蓼は辛味がなく食用にならぬタデの総称，アカノマンマは粒状の紅花を赤飯にたとえた。

103. P. foliosum H. Lindb. var. paludicola (Makino) Kitamu. ヤナギヌカボ

C，北海道・本州・四国・九州，朝鮮，母種は欧州からシベリア・満州，湿地や水辺群生，—Ⅸ—Ⅹ—，葉がヤナギの葉に似たヌカボの意。

104. P. erecto-minus Makino ヒメタデ

C，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国，湿地や水辺に群生，—Ⅴ—Ⅶ—。

105. P. cuspidatum Sieb. et Zucc. イタドリ 虎杖，黄薬子

A，北海道・本州・四国・九州，山野に普通，—Ⅶ—Ⅹ—，痛み取りに薬効，イタドリ（疼取）の説がある。

106. P. sachaliense Fr. Schm. オオイタドリ

A，北海道・本州（北・中部の日本海沿岸地方），樺太・千島，山地の渓側に群生，—Ⅷ—Ⅸ—，イタドリより大形。

Chenopdiaceae アカザ科

107. Chenopodium album Linn. シロアカザ，シロザ 灰藜

A・G，北海道・本州・四国・九州，旧世界原産，畑地・荒地に最も普通，—Ⅸ—Ⅹ—，現在は雑草として世界各地に伝播，芽心・葉の下面白色を帯びる。

108. C. ambrosioides Linn. ケアリタソウ

G，本州・四国・九州（帰化），中米原産，都市にて雑草化，—Ⅶ—Ⅸ—，茎葉に強い臭気がある。

Amaranthaceae ヒユ科

109. Amaranthus lividus Linn. イヌビユ 野莧

A，北海道・本州・九州，欧州原産，世界に分布する雑草，畠や路ばたに普通，—Ⅵ—Ⅹ—，葉を食用，犬ビユの意。

110. Achyranthes fauriei L'ev. et Van. ヒナタイノコズチ 牛膝

A・B・C，本州・四国・九州，中国，路傍・藪地周辺，—Ⅷ—Ⅸ—，豕槌は節の太い茎をイノコの脚の膝頭にたとえたもの，果実がとげをもち衣服や動物などに着いて運ばれる。

Portulacaceae　スベリヒユ科

111 Portulaca oleraceae Linn.　スベリヒユ　馬歯莧

A・G，北海道・本州・四国・九州，全世界の温帯から熱帯に雑草として野生，畑・路傍・庭園などの日向に普通，—Ⅶ—Ⅸ—，茎葉を食用，食べるとき粘滑なので滑りヒユの意。

Caryophyllaceae　ナデシコ科

112. Stellaria aquatica (Linn.) Scop.　ウシハコベ　鵝児腸

B・G，北海道・本州・四国・九州，北半球暖帯・温帯および北アフリカ，路傍・畑地などに普通，—Ⅳ—Ⅴ—，牛ハコベはハコベに比べて大形の意。

113. S. media (Linn.) Villars　コハコベ　繁縷

A，北海道・本州・四国・九州，旧世界原産，現在世界中に伝播，路傍・田畑などの向陽地に最も普通，—Ⅲ—Ⅸ—，春の七草の一つ，小鳥(カナリア)の餌，ハコベはハコベラの略。

114. S. alsine Grimm var. undulata (Thunb.) Ohwi　ノミノフスマ　天蓬草

C，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，北半球温帯一般，山地・平地の田畔など普通，—Ⅳ—Ⅹ—，蚤の衾は小形の葉をノミの夜具にたとえた。

115. Cucubalus baccifer Linn. var. japonicus Miq.　ナンバンハコベ，ツルセンノウ

D・F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・南千島・樺太，種としては欧州・ヒマラヤ・台湾，山野に群生，—Ⅶ—Ⅹ—，南蛮ハコベは海外から渡来したハコベを意味するが，実は誤認，蔓センノウはつる性で同類のセンノウに似ている。

116. Melandryum firmum (Sieb. et Zucc.) Rohrb.　フシグロ

E，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・東シベリア，原野や山地，—Ⅵ—Ⅸ—，節黒は節が暗紫色。

Ranunculaceae　キンポウゲ科

117. Clematis apiifolia DC.　ボタンヅル

A・B・D，本州・四国・九州，朝鮮・中国，山野籔地に群生，—Ⅷ—Ⅸ—，牡丹蔓は葉がボタンの葉のようでつる性の意。

118. C. terniflora DC.　センニンソウ

B・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，山野・路傍など向陽地，—Ⅷ—Ⅹ—，有毒植物，仙人草の意。

119. Thalictrum aquilegifolium Linn.　カラマツソウ

A・B・D，北海道・本州・四国・九州，欧亜大陸の北温帯および亜寒帯，山地・高原に多

い，—Ⅶ—Ⅸ—，唐松草は花のようすによる。

Lardizabalaceae　アケビ科

120. Akebia quinata (Thunb.) Decaisne　アケビ，アケビカズラ　野木瓜・木通

A・B・D，本州・四国・九州，朝鮮・中国，山野の叢林，—Ⅳ—Ⅴ—，五小葉からなる掌状複葉，果肉は食用，茎は編細工，アケビは果実の開く意，植物を指すときはアケビカズラ。

121. A. trifoliata (Thunb.) Koidz.　ミツバアケビ

D・E，北海道・本州・四国・九州，中国，山野の叢林，—Ⅳ—Ⅴ—，三小葉の掌状複葉，三葉アケビの意，果実は食用，果皮は味噌漬，茎はアケビ細工。

Berberidaceae　メギ科

122. Berberis amurensis Rupr. var. japonica (Regel) Rehd.　ヒロハノヘビノボラズ

B，北海道・本州・四国・九州，母種は朝鮮・満州・アムール，山地叢林に生える，—Ⅵ—，広葉蛇上らずの意。

Magnoliaceae　モクレン科

123. Magnolia obovata Thunberg　ホオノキ　厚朴・商州厚朴

B，北海道・本州・四国・九州(日本特産)，中国，山地林地，—Ⅴ—Ⅵ—，材は刀の鞘・下駄・器具・版木など，葉は食物を包む。古名ホオガシワは昔この葉に食物を盛ったのによる。

Lauraceae　クスノキ科

124. Lindera umbellata Thunb. var. membranaceae (Maxim.) Momiyama　オオバクロモジ

B・D，北海道・本州，山地林中，—Ⅳ—，樹皮の油は香水の原料，材は上等な爪楊子に使う。大葉黒文字は樹皮の黒色の斑点を文字になぞらえた。

125. Neolitsea sericea (Blume) Koidz.　シロダモ，シロタブ

B・D，本州・四国・九州，朝鮮・台湾・中国，山地や平地の林中（暖地性常緑樹），—Ⅸ—Ⅹ—，白ダモは葉の裏が白いのによる。

Papaveraceae　ケシ科

126. Chelidonium majus Linn. var. asiaticum (Hara) Ohwi　クサノオウ　白屈菜

A・B・D，北海道・本州・四国・九州，東亜温帯，母種は欧州・アジア西部の温帯，低地の路傍・林縁・石垣など陽地に普通，—Ⅴ—Ⅶ—，有毒植物，薬用（丹毒），草の黄の意で，黄色の汁を出すによる。

Cruciferae　アブラナ科

127. Rorippa indica (Linn.) Hochr.　イヌガラシ　葶藶

C，北海道・本州・四国・九州・琉球，台湾・中国・朝鮮・インド，原野・道ばた・庭園などやや湿地に普通，—V—IX—，犬芥は雑草で食用にならない意，薬用（中国では甜葶藶・苦葶藶がある）。

Crassulaceae　ベンケイソウ科

128. Sedum lineare Thunb.　オノマンネングサ　タカノツメ　佛甲草

A，本州・四国・九州・琉球，低山地・草地，観賞用として人家の庭に植える，—V—VI—，雄の万年草，雌の万年草に対する名で，より大きくなかなか枯れないで永く生育するによる。鷹の爪は鋭く尖った葉による。

Saxifragaceae　ユキノシタ科

129. Hydrangea paniculata Sieb.　ノリウツギ

D，北海道・本州・四国・九州，中国・樺太・南千島，山地に普通，変化が甚だ多い。—VII—IX—，幹の内皮から製紙用(和紙)の糊をとる。根はパイプ(さびたパイプ)をつくる。

130. Deutzia crenata Sieb. et Zucc.　ウツギ，ウノハナ

A・B・G，北海道・本州・四国・九州，中国，山地に普通，東北地方では畑畔に栽植，境界の目印用，—V—VI—，材で木釘をつくる。空木の意，別に卯月(陰暦4月)に花をつけることによる。

Rosaceae　バ　ラ　科

131. Stephanandra incisa (Thunb.) Zabel　コゴメウツギ

B，北海道(日高)・本州・四国・九州，朝鮮，低山地に普通，—V—VI—，小米空木の意で，小さい白花を小米(砕けた米粒)にたとえた。

132. Duchesnea chrysantha (Zoll. et Mor.) Miq.　ヘビイチゴ　蛇苺

A・B・C・G，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国・マレーシア・インド，低地草原・田畔など向陽地に普通，—IV—VI—，蛇苺は人間が食べないで蛇が食うの意，俗説は有毒といわれるが無毒，美味でない。

133. Rubus microphyllus Linn. fil.　ニガイチゴ

B，本州・四国・九州，中国，山地叢林周縁に普通，—IV—V—，苦苺は核果は赤熟，液汁は甘いが核は苦い。5月に熟す五月苺という。

134. R. palmatus Thunb. var. coptophyllus (A. Gray) Koidz.　モミジイチゴ，キイチゴ

B・G，本州(北部・中部地方)，山野に普通，—Ⅵ—Ⅴ—，モミジ苺は葉形がカエデの葉に似ている。木苺および黄苺は木本性で果実が黄熟するに困る。核果は美味。

135. R. parvifolius Linn.　ナワシロイチゴ，サツキイチゴ　紅梅消

A・B・G，北海道・本州・四国・九州，中国・台湾，平地・丘陵地に最も普通，—Ⅴ—Ⅶ—，苗代苺は6月の苗代のころ実が熟すの意，皐月苺は陰暦5月に熟すから，核果は深赤色で美味。

136. Sanguisorba officinalis Linn.　ワレモコウ　地榆

E・G，北海道・本州・九州，欧州・シベリア・中国・朝鮮，山地草原にやや普通，—Ⅶ—Ⅹ—，吾木香の意，木香(キク科植物)古くから日本の木香の意味でワレモコウの名があった。これが名だけ本種にうつったか，それとも間違えたものか不詳。

137. Agrimonia pilosa Ledeb.　キンミズヒキ　龍牙草

A・B・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国・東欧～シベリア，草地・路傍に普通—Ⅶ—Ⅹ—，金水引の意で，細長い黄色の花穂をミズヒキ(タデ科植物)にたとえたもの。

138. Rosa multifora Thunb.　ノイバラ　野薔薇

A・B・D，北海道・本州・四国・九州，原野・河岸など，—Ⅴ—Ⅵ—，偽果は営実(漢名)といい薬用，野外に生えるバラの意で，元来トゲのある低木をイバラと総称，薔薇をイバラという。

139. Prunus mume Sieb. et Zucc.　ウメ　梅

A・B・G，九州(大分県山間谷川沿い)に野生，中国原産，古代日本に渡来，広く栽植，—Ⅱ—Ⅳ—，果実を食用，品種多く観賞用，ウメの語源　一つは鳥梅，薫べ梅のことで乾燥品を薬用にするもの，梅の漢音 mui または mei の転訛，もう一つは朝鮮語のマイに由来するという説がある。

140. P. persica (Linn.) Batsch.　モモ　桃

A，九州などに野生，中国原産，古く日本に渡来，品種多く広く栽植，—Ⅳ—Ⅴ—，果実は夏の重要な果物，葉は薬用，花や樹形は変化が多く観賞用，日本では丸くて中の固いものをモモといい，ヤマモモ(ヤマモモ科)をモモといった。このモモを本種が大陸から渡来してとって変ったという。

141. P. grayana Maxim.　ウワミズザクラ

B・D，北海道・本州・四国・九州，山地や丘陵地林内，—Ⅳ—Ⅵ—，核果ははじめ黄熟し後に黒くなる。未熟で緑色のものを塩漬にして食用，ウワミゾザクラ(上溝桜)の転訛したもの，昔亀甲で占った時，この材の上面に溝を彫って使ったので上溝といった。紅葉が美しい。

Leguminosae　マ　メ　科

142. Albizia julibrissin Durazz. ネムノキ　合歓・夜合樹

A・F・G，本州・四国・九州，イラン～南アジア一般，河岸や山野に普通，—Ⅵ—Ⅶ—，ネムノキは小葉が夜間に閉じる（睡眠運動）による。

143. Gleditsia japonica Miq.　サイカチ

E，本州（中・南部）・四国・九州，山地林中，—Ⅴ—Ⅵ—，新葉を食用，豆果は石鹸の代用，古名　西海子（サイカイシ）の転訛したもので，サイカイシまたはサイカイジュという。

144. Trifolium repens Linn.　シロツメクサ，ツメクサ，オランダゲンゲ，クローバー

A・B・D，江戸時代日本に渡来，現在野生化（帰化植物），欧州原産，—Ⅵ—Ⅶ—，牧草・緑肥，和蘭ゲンゲ，詰め草，現在は白詰草という。昔和蘭人がガラス（ぎやまん）器具を箱に入れ，本種の枯草を詰めて長崎港に運んできたことに因る。

145. Lespedeza cyrtobotrya Miq.　マルバハギ，ミヤマハギ

E・F，本州・四国・九州，朝鮮・中国，山野の向陽地，—Ⅷ—Ⅹ—，円葉萩の意。

146. L. cuneata (Du Mont. d. Cours.) G. Don　メドハギ　鉄掃箒

A・F，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・台湾・インドおよびオーストラリア，原野・山地の向陽地，—Ⅷ—Ⅹ—，目処萩の意味で，筮（メドギ）萩が省略されたもの。

147. L. pilosa (Thunb.) Sieb. et Zucc.　ネコハギ，鐵馬鞭

F，本州・四国・九州，朝鮮・中国，日当りよい草地や畑地，—Ⅶ—Ⅸ—，猫萩は全株に毛が多く生えているため。

148. Kummerovia striata (Thunb.) Schindler　ヤハズソウ　鶏眼草

B・F，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・満州・中国・台湾，北米に帰化，原野路傍に普通，—Ⅷ—Ⅹ—，牧草（日本では実用化されていないが，外国では japan clover と呼ばれ利用されている）矢筈草は葉を指先で引っぱると，矢筈状に切れることによる。

149. Desmodium oxyphyllum DC.　ヌスビトハギ　山馬蝗

D，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・台湾・中国・北インド，林地や半陰の草地，—Ⅶ—Ⅹ—，豆果は短い鈎形毛があって，衣服などにつき種子を散布する。盗人萩は豆果の形が盗棒の足跡に似ているに因る。

150. D. fallax Schindl.　ヤブハギ

B・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・ウスリー・中国，低地の林地や半陰の草地，—Ⅷ—Ⅹ—，藪萩の意。

151. Vicia cracca. Linn.　クサフジ

A・B・D，北海道・本州・九州，北半球の湿帯・亜寒帯，山野に普通，—Ⅴ—Ⅶ—，牧草

(日本では利用されていない),草藤の意味，花と草全体がフジに似ているに因る。

152. Dumasia truncata Sieb. et Zucc.　ノササゲ，キツネササゲ

B，本州・九州，山地林縁や藪林，—Ⅷ—Ⅸ—，狐豇豆，野豇豆の意味，原野には生えない。

153. Pueraria lobata (Willd.) Ohwi　クズ　葛

B・D・E・F・G，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，山野に普通大群落，—Ⅶ—Ⅸ—，根　肥大して薬用，葛粉をとる。葉には牛馬の飼料，クズはクズカズラの略称，一説に昔奈良県国栖(クズ)の人が葛粉をとって，売りにきたので，クズというようになった。

154. Indigofera pseudo - tinctoria Matsum.　コマツナギ　馬棘

E・F，本州(中部以西)・九州，中国，原野に最も普通，—Ⅶ—Ⅸ—，　駒繋は茎が丈夫で馬をつなぐことができるの意。

155. I. decora Lindl.　ニワフジ，イワフジ

E，本州(近畿南部)・四国・九州，渓流の岩上，平地の人家の石垣に栽植，あるいは野生状，—Ⅴ—Ⅵ—，庭藤または岩藤の意。

156. Amphicarpaea edgeworthii Benth. ver. trisperma (Miq.) Ohwi　ウスバヤブマメ

A，北海道・本州(中部以東)・九州(まれ)，朝鮮・満州・ウスリー，草地・林縁に普通，—Ⅸ—ⅩⅠ—，薄葉藪豆の意。

157. Wisteria floribunda (Willd.) DC.　フジ　紫藤

B・D・E・F，本州・四国・九州，山地に自生大繁茂，庭園に栽植，花色に変化が多い。フジは吹き散るの意。漢名の紫藤は中国産のシナフジ　W. sinensis Sweet. である。

Geraniaceae　フウロウソウ科

158. Geranium thunbergii Sieb. et Zucc.　ゲンノショウコ，ミコシグサ

A・E・F，北海道・本州・四国・九州，平地に普通，—Ⅶ—Ⅹ—，薬草で葉を乾かし煎じて飲む，下痢止めとして有名,現の証拠は飲むとすぐ効果が現われることに因る。果実が裂開してみこしの屋根に似るので，別名ミコシグサ。

Oxalidaceae　カタバミ科

159. Oxalis corniculata Linn.　カタバミ，スイモノグサ　酢漿草

A，北海道・本州・四国・九州，世界の暖帯および熱帯，平地・草原・路傍に普通，変化が多い。—Ⅴ—Ⅸ—，傍食は葉の一側が欠けている意味，酢物草は酸味があるによる。アカカタバミは茎葉が赤紫色，ウスアカカタバミは茎葉が緑紫色のものをいう。

Rutaceae　ミカン科

160. Zanthoxylum piperitum (Linn.) DC.　サンショウ　蜀椒

A・B・D・E，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国，山地に自生，変異多く栽植，—Ⅳ—Ⅴ—，若い葉を食用，果実を薬用や香味料，山椒の意で，古名ハジカミはハジカミラの略，ハジははぜる，カミラはニラの古名，すなわち果皮が開裂し，味がからくニラに似ているによる。

Euphorbiaceae　トウダイグサ科

161. Acalypha australis Linn.　エノキグサ，アミガサソウ　人莧・鐵莧・海蚌含珠

A・B・D・E，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・ウスリー・中国・フィリピン，平地路傍・畑地に普通，—Ⅷ—Ⅸ—，榎草は葉がエノキの葉に似ている。編笠草は包葉が編笠に似ているによる。

162. Euphorbia pekinensis Rupr.　タカトウダイ

E・F，本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国，山地・丘陵地に生え変化が多い，—Ⅵ—Ⅶ—，有毒植物，丈の高いトウダイグサの意。

Coriariaceae　ドクウツギ科

163. Coriaria japonica A. Gray　ドクウツギ，イチロベゴロシ

E・F・G，北海道・本州(近畿以東)，河畔，山地や丘陵地の斜面に生える，—Ⅴ—，有毒植物，毒空木はウツギ（ユキノシタ科）に似ていて有毒のため，市郎兵衛殺し，果実は多汁，初め赤色，熟して紫黒色となる，誤って食べると猛毒のため死ぬ。

Anacardiaceae　ウルシ科

164. Rhus ambigua Lavallée, ex Dippel　ツタウルシ　鉤吻・野葛

B，北海道・本州・四国・九州，中国・樺太・南千鳥，山林中に生える，—Ⅴ—Ⅵ—，ツタ漆は蔓性のウルシの意。

165. R. trichocarpa Miq.　ヤマウルシ

D，北海道・本州・四国・九州，千島（南部）・朝鮮・中国，丘陵や山地に普通，山漆は山地に生えるウルシの意。

166. R. javanica Linn.　ヌルデ，フシノキ　鹽麩子

B・D・E・F，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・満州・中国・インド，山地や丘陵地に普通，—Ⅷ—Ⅸ—，木から汁液をとり物に塗るのでヌルデ，葉にヌルデノフシムシが寄生し

五倍子を生じ，これをフシといい，それ故フシノキという。

Celastraceae　ニシキギ科

167. Celastrus orbiculatus Thunb.　ツルウメモドキ

A・E，北海道・本州・四国・九州，山地・丘陵地に普通，しばしば栽植，—V—VI—，蔓性ウメモドキに似た木の意，生花用。

168. Euonymus alatus (Thunb.) Sieb.　ニシキギ，ヤハズニシキ　衛矛・鬼箭

A・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・樺太・南千島，山地に普通，多数の品種があって栽植，—V—VI—，錦木は秋の紅葉が美しいので錦にたとえた。矢筈錦木は枝にコルク質の翼を矢筈にたとえた。果実は毛ジラミを殺すのに使うのでシラミコロシともいう。

169. E. fortunei (Turcz.) Hand.-Mazz. var. radicans (Sieb., ex Miq.) Rehd.　ツルマサキ　扶芳藤

B・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮，山地に生え変異多く栽植，—VI—VII—，蔓状のマサキの意。

170. E. oxyphyllus Miq.　ツリバナ

B・D，北海道・本州・四国・九州，南千島・朝鮮・中国，山地に普通，—V—VI—，果実はアタマジラミの駆除薬，吊花の意，花や果実が垂れ下っているによる。

171. E. planipes (Koehne) Koehne　オオツリバナ

D，北海道・本州（中部以東），朝鮮・満州・南千島，山地に生える，—V—VI—，大きい帛花の意で葉が大形。

Aceraceae　カエデ科

172. Acer palmatum Thunb. var. matusumurae (Koidz) Makino　ヤマモミジ

B，北海道・本州・四国・九州，山地に生え，変異が多く園芸品種も多い。—V—，山モミジの意味，秋の紅葉が美しい。

Vitaceae　ブドウ科

173. Vitis ficifolia Bunge var. lobata (Regel.) Nakai　エビヅル　蘡薁

A・B・D，本州・四国・九州，朝鮮・中国・台湾，丘陵地・山地に普通，—VI—VIII—，果実は黒熟し食用，若い茎と葉はうす赤紫色の色が美しい，この色をエビの色に見立て，エビヅル，古くはエビカズラといった。

174. Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Trautv.　ノブドウ，ザトウエビ　蛇葡萄・野葡萄

A・B・D・E・F，北海道・本州・四国・九州，中国・満州・朝鮮・ウスリー，山野に普通，—Ⅶ—Ⅷ—，野ブドウ，座頭は盲人の目玉に似た実をつけるエビズルの意。

175. Parthenocissus tricuspidata (Sieb. et Zucc.) Planch. ツタ，ナツヅタ 常春藤

B，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，山野に普通，園芸品多く栽植，—Ⅵ—Ⅶ—，平安時代，早春この幹から液をとり，煮つめて甘味料とした。アマズル・アマズラ（甘い液でつるの意），葉は秋に紅葉し，ツタモミジという。ツタは伝うの意。

Actinidiaceae マタタビ科

176. Actinidia arguta (Sieb. et Zucc.) Planch., ex Miq. サルナシ，シラクチズル

B，北海道・本州・四国・九州，山地に生える。—Ⅴ—Ⅶ—，液果食べられる。猿梨はサルが食べるナシの意，シラクチズルはマシラ（猿）口蔓の転訛したもの。

Violaceae スミレ科

177. Viola grypoceras A. Gray タチツボスミレ

A，北海道・本州・四国・九州・琉球，平地や山地に普通，変化が多い，—Ⅳ—Ⅴ—，花は淡紫色，芳香がない。

178. V. verecunda A. Gray ツボスミレ，ニョイスミレ 如意草

B，北海道・本州・四国・九州，平地および丘陵地の湿気ある草地に最も普通，—Ⅳ—Ⅴ—，ツボスミレは庭に生えるスミレの総称，如意スミレは如意は僧侶がもつ仏具の一つ，その形と葉形が類似するに因る。

Onagraceae アカバナ科

179. Circaea mollis Sieb. et Zucc. ミズタマソウ

B，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国・インドシナ，山林の日陰に多い，—Ⅷ—Ⅸ—，水玉草は白い毛のある球形の果実を水玉にたとえた。

180. Oenothera lamarckiana Ser. オオマツヨイグサ

A・B・F，北米原産，明治初年（1870 ごろ）渡来，各地に野生化（帰化植物），—Ⅵ—Ⅸ—，De. Vries の突然変異説の材料となったもの，大形黄色花で夕方開花する。

181. Epilobium pyrricholophum Franch. et Savat. var. pyrricholophum アカバナ

C，北海道（渡島）・本州・四国・九州，朝鮮・中国，田畔・溪畔の水湿地に普通，—Ⅶ—Ⅸ—，赤花は夏秋のころ葉が紅紫色になるによる。

Haloragaceae　アリノトウグサ科

182. Haloragis micrantha (Thunb.) R. Br.　アリノトウグサ　小二仙草

F，北海道・本州・四国・九州・琉球，台湾・中国・マレーシア・オーストラリア，山野の草地に生える，—Ⅶ—Ⅸ—，蟻の塔草はこの植物をアリ塚，細かい花をアリにたとえた。

Araliaceae　ウコギ科

183. Aralia elata (Miq.) Seemann　タラノキ

A・B・D・E・F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・樺太・アムール・ウスリー，山野に普通，—Ⅷ—，若い芽を食用（タラの芽・タラッポ），ウドのような香味がある。

184. A. cordata Thunb.　ウド

D・F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国・樺太，山野に自生，栽培，—Ⅷ—，若い芽を食用，香りよく美味，栽培のときはもやしにして食用。

185. Hedera rhombea (Miq.) Bean　キヅタ，フユヅタ 百脚蜈蚣

B・D，本州・四国・九州・琉球，朝鮮・台湾，山林に普通，—Ⅹ—ⅩⅠ—，ツタ（ブドウ科）に似るが木質の度が強い木ヅタ，常緑のため冬ヅタ。

186. Acanthopanax sieboldianus Makino.　ウコギ，ヒメウコギ　五加

A・B・D・F，支那原産，薬用植物として渡来栽植，—Ⅴ—Ⅵ—，若い葉を食用，根の皮（五加皮）を薬用，五加（支那発音）に木を合せたもの，古名ムコギ。

Umbelliferae　セリ科

187. Hydrocotyle ramiflora Maxim.　オオチドメ

C，北海道・本州・四国・九州，朝鮮，半陰湿地に群生，—Ⅳ—Ⅸ—，葉をすりつぶし止血薬（チドメグサ）とする。チドメグサヨリ大形の意。

188. Torilis scabra (Thunb.) DC.　オヤブジラミ

A・D，本州・四国・九州，南鮮・台湾・中国，平地の草地や藪周辺に群生，—Ⅴ—Ⅶ—，雄藪ジラミは果実は粗大，シラミのようで衣服について散布される。

189. Cryptotaenia japonica Hassk.　ミツバ

B，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・南千島，丘陵地・山地林内に生える，—Ⅵ—Ⅶ—，新苗においあり食用，三葉は3小葉からなるの意。

190. Oenanthe javanica (Blume) DC.　セリ　水蘄

C，北海道・本州・四国・九州・琉球，中国・台湾・マレーシア・インド・クインスランド，低湿地・水田などに普通，—Ⅶ—Ⅷ—，葉に香りがあって食用，しばしば栽培，新苗がせり（競）

合って出るの意。

191. Angelica decursiva (Miq.) Franch. et Savat.　ノダケ　土当帰

B，本州(関東以西)・四国・九州，朝鮮・満州・中国，丘陵地の林内・草地に普通，—XI—，かぜ薬として煎じて飲む。漢名の音読みの転訛。

Cornaceae　ミズキ科

192. Cornus controversa Hemsley　ミズキ，クルマミズキ　燈台木

B・D・G，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，山地に普通，—V—IV—，水木　樹液が多く，春先に枝を折ると水がしたたる。車水木は小枝の分岐状態を車輪にたとえた。防風・防火林として栽植。

GAMOPETALAE　合弁花類

Pyrolaceae　イチヤクソウ科

193. Pyrola japonica Klenze　イチヤクソウ　鹿銜草

A，北海道・本州・四国・九州，丘陵地・山地の林下，—VI—VII—，一薬草の意。

Myrsinaceae　ヤブコウジ科

194. Ardisia japonica (Thunb.) Blume　ヤブコウジ　紫金牛

B・D，北海道(奥尻島)・本州・四国・九州，朝鮮・中国・台湾，丘陵地林内に普通，—VII—VIII—，冬枯れに赤い果実が美しい。

Ebenaceae　カキノキ科

195. Diospyros kaki Thunb.　カキノキ　柿

B，本州・四国・九州，広く栽培，品種が多い。—VI—，果実(甘柿・渋柿)は食用，若い果実は渋をとる。材は堅く器具材。

Styracaceae　エゴノキ科

196. Styrax japonica Sieb. et Zucc.　エゴノキ，ロクロギ

B・D，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・台湾・フィリピン(北部)，山地・丘陵地に生える，—V—VI—，材は傘のろくろに使用するのでロクロギ，果皮はのどを刺激してひどいのでエゴノキ，生の果皮はすり潰して川に流し魚を麻ひさせて捕る。

Oleaceae　モクセイ科

197. Ligustrum obtusifolium Sieb. et Zucc.　イボタノキ

D，北海道・本州・四国・九州，丘陵地の林内に最も普通，変化が多い，—Ⅵ—，樹皮に，白いイボタロウ虫が寄生するのでこの名がある。その虫が分泌したろうは家具のつや出しに使う。

Asclepiadaceae　ガガイモ科

198. Metaplexis japonica (Thunb.) Makino　ガガイモ，クサパンヤ　蘿藦

A，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国・千島（南部），日当りのよい原野・山地に生える，—Ⅷ—，種子は扁平で白色絹糸状の毛を持ち，風にのって飛ぶ。綿の代用として針さしや印肉に用いられる。クサパンヤの名もある。

Convolvulaceae　ヒルガオ科

199. Calystegia japonica Choisy　ヒルガオ　施花・鼓子花

A・B・C・D，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，原野路傍に普通，—Ⅶ—Ⅷ—，淡紅色の花を日中に開くの意。

200. Cuscuta japonica Choisy　ネナシカズラ　金鐙藤・毛芽藤

B（杉山東山麓，クズに寄生大群生），北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・満州・中国，山野でマメ科植物に寄生，—Ⅷ—Ⅹ—。

Verbenaceae　クマツヅラ科

201. Callicarpa japonica Thunb.　ムラサキシキブ　紫珠

A・B・D，北海道（南部）・本州・四国・九州・琉球，満州・中国・台湾，山地丘陵に生え，甚だ多型，—Ⅵ—Ⅷ—，優雅な紫色の果実を紫式部の名で美化した。

Labiatae　シソ科

202. Glechoma hederacea Linn. var. grandis (A. Gray) Kudo　カキドオシ　馬蹄草

A・B・C・D・E，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・ウスリー・アムール・中国・台湾，原種は北半球旧世界温帯一般に広く分布，路傍・藪地に群生，—Ⅳ—Ⅴ—，籬通でつるをのばして垣根をくぐり抜けるの意。

203. Stachya japonica Miq. var. intermedia (Kudo) Ohwi　イヌゴマ，チヨロギダマシ　水蘇

C，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・満州・中国・台湾，低地水辺，—Ⅶ—Ⅷ—，

犬胡麻　果実の形がゴマに似ているが，利用の価植がない。淡紅色唇形花。

204. Mosla punctulata (J. F. Gmel.) Nakai　　イヌコウジユ　石薺葷

F，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・満州・中国・台湾，山地原野，—Ⅸ—Ⅹ—。

205. Clinopodium chinense (Benth.) O. Kuntze var. parviflorum (Kudo) Hara　クルマバナ

A・B・C，北海道・本州・四国・九州，南千島・朝鮮・中国，丘陵地や山地・原野，—Ⅷ—Ⅸ—，車花は花の輪生する様子。

206. Plectranthus inflexus (Thunb.) Vahl, ex Benth.　ヤマハッカ

E，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国・満州，丘陵・山地の林内，—Ⅸ—Ⅹ—，山薄荷の意，香気はない。

Solanaceae　ナ　ス　科

207. Lycium chinense Mill.　クコ　枸杞

A，本州・四国・九州・琉球，朝鮮・満州・中国・台湾，低地，川の土手や溝の縁に普通，—Ⅷ—Ⅸ—，若葉はひたし物，飯に混ぜてクコ飯，果実は酒にひたして枸杞酒をつくり強壮薬とする。

208. Physalis alkekengi Linn. var franchetii (Masters) Hort.　ホオズキ　酸漿

A，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国(北部)，母種は中・南欧から小アジア・中央アジア，山地・原野あるいは栽植，—Ⅵ—Ⅷ—，果実は子どもの玩具，地下茎は乾かして酸漿根と呼び薬用，茎に方言でホオと呼ぶカメムシ類がよくつくのでホオズキと呼ぶ。古名カガチ。

209. Solanum nigrum Linn.　イヌホオズキ　龍葵

B・F，北海道・本州・四国・九州，南北両半球の熱帯から温帯，山地・原野，—Ⅷ—Ⅹ—，有毒植物，液果は黒熟，漢方薬。

Scrophulariaceae　ゴマノハグサ科

210. Paulownia tomentosa (Thunb.) Steud.　キリ

A・B・F，九州(野生状態)，広く栽植，鬱陵島(朝鮮　野生状態)，原産地は不詳，—Ⅴ—Ⅵ—，切ればすみやかに芽を出して，生長が早いのでキリの名がある。

211. Scrophularia kakudensis Franch.　オオヒナノウスツボ

B，北海道・本州・四国・九州，朝鮮，低山地林中，—Ⅷ—Ⅹ—，大きい雛の臼壺の意で花の形による。

Plantaginaceae　オオバコ科

212.Plantago asiatica Linn.　オオバコ　車前

A，北海道・本州・四国・九州・琉球，千島・樺太・東シベリア・台湾・中国・マレーシア山地や低草地に最も普通な雑草，—Ⅳ—Ⅸ—，大葉子の意で，広い葉に因んだ。

Rubiaceae　アカネ科

213. Hedyotis diffusa Willd.　フタバムグラ

C，本州・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・台湾・熱帯アジア，平地や畑地，—Ⅸ—Ⅹ—，双葉ムグラの意。

214. Paederia scandens (Lour.) Merrill var. mairel (Léveillé) Hara　ヘクソカズラ，ヤイトバナ　牛皮凍

A・B・D・E・F，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・台湾・フィリピン，藪地・草地に生え変化が多い，—Ⅷ—Ⅸ—，屁糞蔓または屁臭サカズラは全体に悪臭があるから，古名　クソガゾラ，ヤイトバナは花の中央がお灸のあとに似ているに由る。

215. Rubia akane Nakai　アカネ　茜草

A・B・D，本州・四国・九州，朝鮮・中国・台湾，丘陵地や垣根，—Ⅷ—Ⅹ—，根は染料として茜染，利尿・止血・解熱・強壮剤，染めた色が太陽の出る前の東の空の色に似ていのでアカネ，古くは東の枕言葉“茜さす”が使われた。

216. Galium verum Linn. var. asiaticum Nakai　キバナカワラマツバ

A・B・E・F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮，乾いた日当りよい山地草原，変化が多い。—Ⅵ—Ⅸ—，黄色花の河原松葉は河原に生え葉が松葉に見える意。

Caprifoliaceae　スイカズラ科

217. Sambucus sieboldiana Blume, ex Graebn.　ニワトコ　接骨木

A・B・D・F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国，山野に普通，変化甚だ多い，—Ⅳ—，葉は民間葉，髄は太く軟かいので，顕微鏡の切片をかみそりで切るときの支えとする。死人の杖とし，網針をつくる。（七ケ浜）

218. Viburnum dilatatum Thunb.　ガマズミ　茨蓋

B・D・E・F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国，丘陵地や山地，また人家に栽植，—Ⅴ—Ⅵ—，果実（赤い）漬物の色つけ，スミは染の転訛で，古くは衣類をすり染めした。秋の木の実として美しく，小鳥が好む。

219. Weigela hortensis (Sieb. et Zucc.) K. Koch　タニウツギ

D，北海道・本州，山地谷間に多い，観賞用として栽植，—V—VI—，谷ウツギの意。

220. Lonicera japonica Thunb.　スイカズラ，ニンドウ　忍冬

A・B・D・E・F，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国，丘陵地・山地に普通，—V—VI—，茎葉を薬用，スイカズラ　花に蜜があり，これを吸う時の唇の形に花冠が似ているによる。葉や花をお茶の代用（忍冬茶）とする。忍冬は冬でも枯れないで緑葉をもつによる。

Cucurbitaceae　ウ　リ　科

221. Tricosanthes kirilowii Maxim. var. japnica (Miq.) Kitamura　キカラスウリ

A・B・D・E・F，北海道（奥尻島）・本州・四国・九州・琉球，　母種は朝鮮・中国・インドシナ，漢名　括樓，山野に自生，—VIII—IX—，塊根から澱粉（天瓜粉），根の皮層（瓜呂根）を薬用とする。黄カラスウリは果実が黄いの意。

222. Melothria japonica (Thunb.) Maxim.　スズメウリ

A・B・C・D，本州・四国・九州，朝鮮（済州島），藪地・原野・水田に普通，—VIII—IX—，雀瓜　小型の果実をスズメで表現，あるいは瓜をスズメの卵に見立てた。

223. Gynostemma pentaphyllum (Thunb.) Makino　アマチャヅル　絞股藍

B・E，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国・インド・マレーシア，山地や藪地に多い，—VIII—IX—，葉に甘味があるので名づける。特に利用されない。

Campanulaceae　キキョウ科

224. Adenophora triphylla (Thunb.) A. DC. var. japonica (Regel) Hara　ツリガネニンジン

F，北海道・本州・四国・九州，樺太・南千島・台湾・中国，山地や原野，変化が多い，—IX—X—。

Compositae　キ　ク　科

225. Gnaphalium hypoleucum DC.　アキノハハコグサ　秋鼠麹草

A・E・F，本州・四国・九州，朝鮮・中国・台湾・インド・フィリピン，やや乾燥した山野，—IX—X—，秋咲くホオコグサの意。母子草は正しくない。茎の白毛や頭花の冠毛がほおけ立っていることから名づけたもの。

226. Inula britannica Linn. var. chinensis (Rupr.) Regel　オグルマ　旋覆花

A，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国，湿った平地や河岸，—VII—X—，小車の意で端正な頭状花序の放射状舌状花を小さい車になぞらえた。

227. Carpesium abrotanoides Linn.　ヤブタバコ　天名精

B，北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国・インド・コーカサス・南ヨーロッパ，林地や藪地に生える。—Ⅸ—XⅠ—，葉の汁ははれや打傷に，根や種子も薬用，一種の臭気がある。藪地に生え，タバコに似た葉をもつの意。

228. Eupatorium lindleyanum DC.　サワヒヨドリ

A・E・F，北海道・本州・九州・琉球，台湾・朝鮮・満州・中国・フィリピン，山地の日当りよい草地や乾地，—Ⅷ—X—，ヒヨドリバナに似て湿地に生えるによる。

229. Kalimeris pinnatifida (Maxim.) Kitam. ユウガギク

A（畑あとに大群生）・E・F，本州（近畿以北），日当りよい山野草地，—Ⅶ—X—，園芸品種がある，柚が菊あるいは柚香菊の意。

230. Erigeron annuus (Linn.) Pers. ヒメジヨン，ヤナギバヒメギク

A・B・D・F，北米原産，明治初年（1865年ごろ）渡来，帰化植物，荒地・路傍にもっとも普通に群生，—Ⅶ—X—，姫女苑の意。

231. E. bonariensis Linn.　アレチノギキ　野塘蒿

A（畑あとに大群落）・F，南米原産，明治中ごろ（1890年ごろ）渡来，帰化植物，世界に広く分布，雑草として荒地・路傍に大群生，—Ⅶ—X—，荒地の野菊の意。

232. Aster scaber Thunb.　シラヤマギキ

E・F，北海道・本州・九州，朝鮮・満州・中国，山地・原野の林内に生える，—Ⅷ—X—，若苗をムコナといって食用。

233. A. ageratoides Turcz. var. ovatus (Franch. et Savat.) Nakai　ノコンギク

A・C，本州・四国・九州，東亜からインド，山地丘陵地に最も普通，変化が多く栽植品もある，—Ⅷ—X—，野にある紺菊の意。

234. A. tripolium Linn.　ウラギク・ハマシオン

C（極く少ない），北海道・本州・四国・九州，朝鮮・中国（北部）・満州・東シベリア・樺太・北米・ヨーロッパ，海岸や内陸の塩性地の湿地に生える，—Ⅷ—X—XⅠ—，浦菊，浜紫苑の意で，海岸に生えるによる。

235. Petasites japonicus (Sieb. et Zucc.) Maxim. フキ

B・D，本州・四国・九州・琉球，朝鮮・中国・樺太・千島（中・南部），山地・丘陵地に生える。また蔬菜として栽植，—Ⅳ—Ⅴ—，葉柄・若い花茎（フキノトウ）は食用や薬，雌雄異株。

236. Artemisia japonica Thunb.　オトコヨモギ　牡蒿

A・E・F，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・満州・中国・フイリピン，日当りよい丘陵地や山地に普通，葉形に変化が多い，—Ⅷ—XⅠ—，雄のヨモギ，種子が小さく種子がないものと思い牡と名づけたといわれる。

237. A. princeps Pampan.　ヨモギ，カズザキヨモギ　艾

A・B・C・D・E・F（大群落），本州・四国・九州・小笠原，朝鮮，荒地や低地に群生，—Ⅸ—Ⅹ—，春新苗を採り草餅の材料，葉の下面の毛でモグサを作り民間薬（お灸）として効果が大きい。太いものは杖に作る。

238. Siegesbeckia pubescens (Makino) Makino　メナモミ

A・B・D（点在），北海道・本州・四国・九州，朝鮮・満州・中国，荒地に普通，—Ⅸ—Ⅹ—，メは雌の意でオナモミの雄に対する語，ナモミはナズムの意で，ナゴミさらにナモミと転化，粘液のある総包がすぐくついて困りはてるによる。果実が他の物に付着して散布される。

239. Bidens frondosa Linn.　アメリカセンダングサ，セイタカタウコギ　紫茎鬼針草

A・C，北米原産，各地の低湿地や道ばたに群生，帰化植物，—Ⅸ—Ⅹ—，アメリカのセンダン（センダン科植物）の葉に似た草の意，背高田五加木で丈の高いタウコギ（キク科）の意。

240. Cirsium nipponicum (Maxim.) Makino　ナンブアザミ

A・B・D，本州（中部以北），山地・原野に群生，—Ⅷ—Ⅹ—，南部地方（岩手県）産の山薊の意。

241. Picris hieracioides Linn. var. glabrescens (Regel) Ohwi.　コウゾリナ　毛蓮菜（慣用）

A・D・E・F，北海道・本州・四国・九州，樺太，丘陵地・原野に普通，変化が多い，—Ⅴ—Ⅹ—，カミソリ葉の意で，茎や葉の剛毛が人の皮膚にふれ引っかかるのを剃刀に見立てた。

242. Helianthus tuberosus Linn.　キクイモ

A，北米原産，各地に野生化，または品種が多く栽植，—Ⅶ—Ⅹ—，塊茎は果糖の原料，味はまずい，イヌリンを多量に含む，花は観賞用。菊芋の意で，キクのような花で地下に芋ができる。

243. Lactuca indica Linn. var. laciniata (O. Kuntze) Hara　アキノノゲシ　山莴苣

A・B・D，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・台湾，低地草原，—Ⅸ—ⅩⅠ—，ノゲシに似て秋開く花。

244. Sonchus oleraceus Linn.　ノゲシ，ハルノノゲシ，ケシアザミ　苦菜・濵苦菜

C，北海道・本州・四国・九州・琉球，朝鮮・樺太・欧亜大陸，北米に帰化，いたる所の路傍や荒地，—Ⅴ—Ⅷ—，アザミに似ているが刺がなく柔かい，幼苗を食用。

245. Youngia denticulata (Houtt.) Kitam.　ヤクシソウ

A・D・E・F，北海道・本州・四国・九州，日当りよい山地に普通，—Ⅸ—ⅩⅠ—，晩秋の野を飾る黄色花の野草，薬師草の意。

む　す　び

(1) 史跡「大木囲貝塚」環境整備事業にかかわる試掘調査の一環として，当地域内の現生植物を調査する第一次実施事項として，1．基本調査（昭和48・49年度）と2．精密調査（昭和49・50年度）によって植生状況と植物相を明らかにすることとし，その第一歩として，昭和48年度中に実施した結果をもとに，植生状況と所産植物目録を中心に整理した。

(2) 植生の状況については，A：台地上旧耕作地区（主として貝塚分布地区）　B：スギ・クロマツ・落葉広葉林地区　C：低地・湿地・沼沢地区　D：竹林　・落葉広葉林，同伐採地区　E：アカマツ・ナラ林，同伐採地区　F：西斜面旧耕作地区　G：西側断崖地区の7地区に分け，各地区の植生状況を写真（付録(1)，図1～23）と植生地図（付録(2)）で示した。

(3) 植物相については，現在までに確認した73科245種類の所産植物目録を編み，その活用を考慮して，学名・和名・漢名，分布（当地域内・国内・国外），植生状況・花期，利用・その他必要事項を併記した。

この調査報告は，いずれも未完成の域を出でないが，これからの調査の進行にともなって，逐次完全なものにしたい。ついてはご指導ご鞭たつを切にお願いいたしたい。

3．付　　録

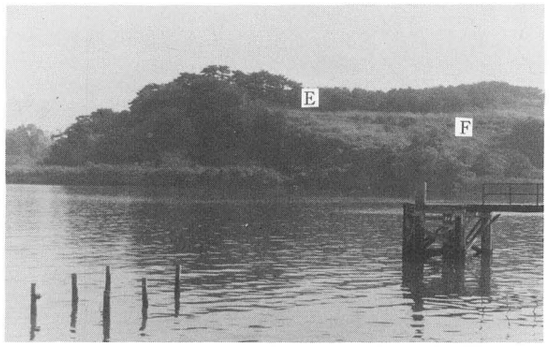
（1）植生写真〈図版 1 ～ 8（図 1 ～23）〉

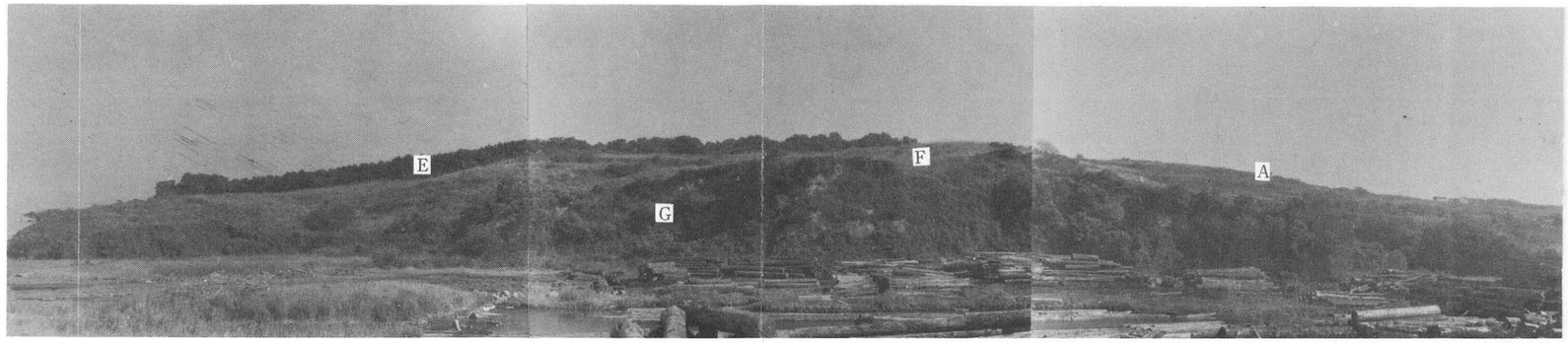
（2）植生地図〈図版 9〉

(1) 植生写真

図版 1

1 史跡「大木囲貝塚」を北方および西方より望む（昭和48.11.4撮影）





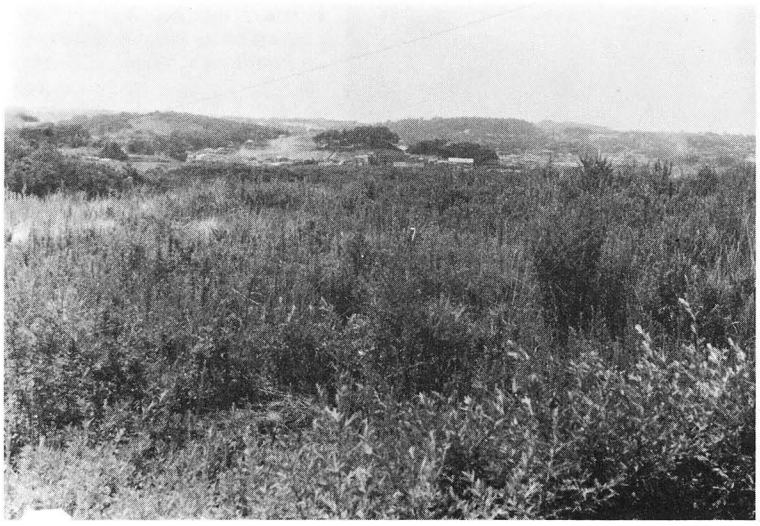
2 史跡「大木囲貝塚」を東方より望む
（昭和49.11.20撮影）

A：台地上旧耕作地区（主として貝塚分布地区）
B：スギ・アカマツ・落葉広葉樹林地区
C：低地・湿地・沼沢地区
D：竹林・落葉広葉樹林，同伐採地区
E：アカマツ・ナラ林，同伐採地区
F：西斜面旧耕作地区
G：西側断崖地区

図版　2　A：台地上旧耕作地区（主として貝塚分布地区）

3　中央通路より東方スギ林に向って
畑跡にアレチノギク・ヨモギが大群生，スギ林の近くはススキ・クズが大繁茂。
（昭和48.9.1 撮影）

4　中央通路上から北方クロマツを望む
通路上はカゼクサ群生，両側の畑跡はアレチノギク・ヨモギ大群生，コウゾリナ・ヤクシソウが点在。　（昭和48.9.15 撮影）



5　中央通路より西北畑跡，塩釜市街を望む
ノコンギク・ヨモギ・アレチノギク群生，ススキも広く群生。　（昭和48.8.20 撮影）

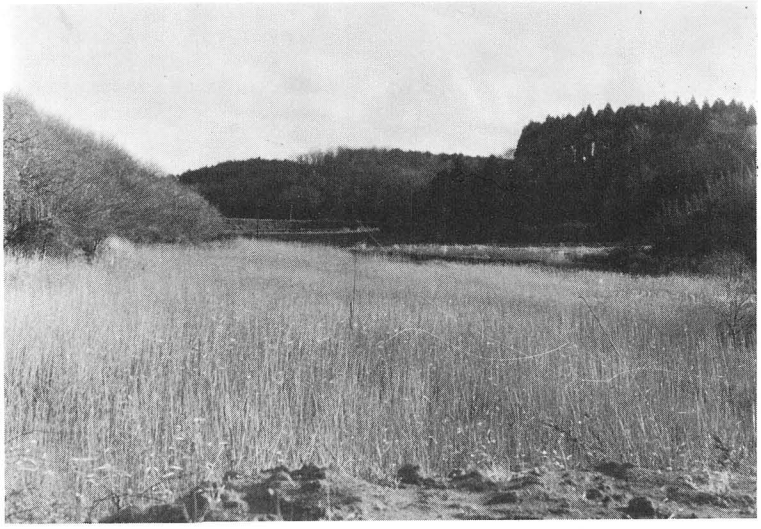
図版　3　B：スギ・クロマツ・落葉広葉樹林地区

6　東側よりB地区南部を望む
スギ林(植林　樹令25～50年)，コナラ・クリ・ウワミヅザクラ・エゴノキ・ヤマザクラ・ホウノキなどの落葉広葉樹林，手前にススキが群生。　(昭和49.1.20 撮影)

7　東側よりB地区中央部を望む
スギ林にはさまれた落葉広葉樹林に，クズが大繁茂し樹冠を覆う。手前はススキの群生。　(昭和48.8.20 撮影)

8　北側よりB地区北部を望む
右側奥はスギ林，周辺部は落葉広葉樹林，クズが樹冠を覆う。手前はC地区の低地畑跡。　(昭和48.8.20 撮影)

図版　4　C：低地・湿地・沼沢地区



9　北方埋立地よりC地区を望む
右手奥スギ林，竹林，旧畑跡の低地，ガマの群生する湿地，手前がマコモ・ヨシの群生する沼沢地ともに旧水田跡である。
（昭和49．1．20　撮影）

10　竹林の下，湿地の上にある湧泉
2か所のうち北側のもの，ミゾソバ・セリ群生。　（昭和48．9．16　撮影）

11　旧水田跡の湿地
ガマ・セリ・サンカクイ・フトイ・ミズビエ・ミゾソバ・アブラガヤ・マコモ・ヨシなど繁茂。　（昭和48．9．1　撮影）

図版　5　D：竹林・落葉広葉樹林，同伐採地区

12　竹林および湿地を望む
マダケの竹林で，ノブドウ・アケビ・クズカナムグラ・カラハナソウなどの蔓性植物が著しい。湿地にはガマ・コガマが群生。
（昭和48．8．20　撮影）

13　広葉樹林および沼沢地を望む
コナラ・クリ・ナラガシワ・ウワミズザクラ・ヤマザクラ・オオバクロモジ・ホウノキ・エゴノキなどの落葉広葉樹にスギが混生，手前の旧水田跡沼沢地にはマコモ・ヨシが群生。　（昭和49．1．20　撮影）

14　広葉樹林伐採地を東側より望む
旧畑跡で，ヨモギ・ススキが群生，クズが大繁茂，ガマズミ・クワ・ウツギ・ヌルデ・バッコヤナギ・キツネヤナギなどが畔跡に生える。　（昭和48．9．16　撮影）

図版　6　E：アカハツ・ナラ林，同伐採地区

15　東側埋立地より西方に向って
凝灰岩の上にはアカマツ林，周辺にコナラ・ナラガシワ・クリ・カシワ・ガマズミ・ヤマウルシなどの落葉広葉樹が繁茂。
（昭和49．1．20　撮影）

16　中央測線北部，アカマツ林西側
アカマツの伐採された向陽地には，ナラガシワ・コナラ・クリ・ガマズミ・ヤマハギなどが繁茂，アズマザサやススキが群生。
（昭和48．9．16　撮影）

17　中央測線西側伐採地
ススキやアズマザサが大群生，場所によってワラビ・クズが繁茂。
（昭和48．10．6　撮影）

図版　7　F：西斜面旧耕作地区

18　西斜面旧耕作地の中央部付近を台地上より望む
耕作地跡にはヨモギやススキが繁茂，畦跡にはクワ・ヌルデ・クルミ・ニワトコ・タラノキなどが生える。
（昭和48．9．1　撮影）

19　西斜面旧耕作地の北部付近を台地上より望む
手前は貝塚試掘跡，畑跡にはススキ・ヨモギが群生，畦跡にはクルミ・ヌルデ・ケヤキ・クワ・キリなど，前方のスギ林は民有地。
（昭和48．9．1　撮影）

20　西斜面旧耕地を下方より望む
段々畑の畦にはクワ・ヌルデ・タラノキ・ニワトコなどの木本が，ススキやクズが群生。
（昭和48．10．6　撮影）

図版　8　G：西側断崖地区

21　西側断崖地区を上方に向って望む
断崖の上部畦にはキリ・ヌルデ・タラノキ・クルミ・クワなどがみられ，ススキ・マルバハギ・ナワシロイチゴ，その上をクズが覆う。　（昭和48. 10. 6　撮影）

22　西側断崖地区を上方に向って
ケヤキ・ヌルデ，ススキやクズの繁茂が著しい。ドクウツギが散生。
（昭和48. 10. 6　撮影）

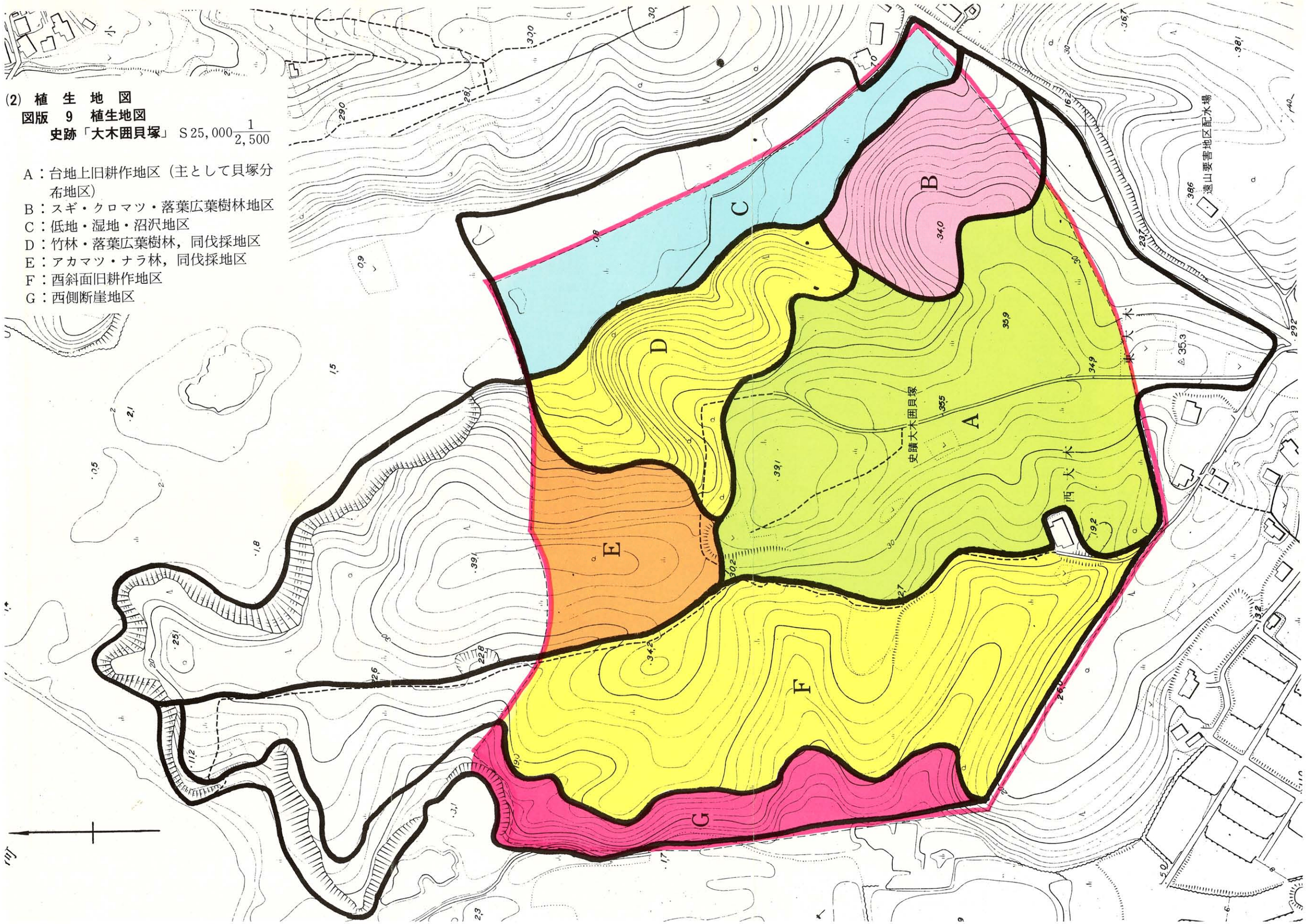
23　西側断崖のクズの繁茂状況
木本の少ない向陽地にはススキとともにクズが大繁茂。　（昭和48. 9. 16　撮影）

(2) 植　生　地　図

図版　9　植生地図

史跡「大木囲貝塚」 S 25,000 $\frac{1}{2,500}$

A：台地上旧耕作地区（主として貝塚分布地区）
B：スギ・クロマツ・落葉広葉樹林地区
C：低地・湿地・沼沢地区
D：竹林・落葉広葉樹林，同伐採地区
E：アカマツ・ナラ林，同伐採地区
F：西斜面旧耕作地区
G：西側断崖地区



七ヶ浜町文化財調査報告書第２集
史跡「大木囲貝塚」環境整備調査報告書 II

昭和49年３月20日印刷
昭和49年３月31日発行

発 行　七ヶ浜町教育委員会
宮城郡七ヶ浜町吉田浜字野山
印 刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24 電話(25)6466